

JICA プロフェッショナルの 挑戦

シリーズ8:ザンビア

「ザンビア大学獣医学部」関連プロジェクト

～ODAがアフリカの未来を創る～



人材

J R

09-011

《訂正》

『JICA プロフェッショナルの挑戦』（シリーズ8：「ザンビア大学獣医学部」関連プロジェクト）の文中において誤りがありました。お詫びして訂正させていただきます。

P73 最終行 （第2部 JICA 専門家等へのインタビュー 橋本栄治氏）

（誤）高度成長下

（正）構造調整下

JICA プロフェッショナルの 挑戦

シリーズ8:ザンビア

「ザンビア大学獣医学部」関連プロジェクト

～ODAがアフリカの未来を創る～

はじめに

昨年10月、J B I C (円借款部門) と J I C A が統合し、新生 J I C A が誕生しました。その結果、新生 J I C A は、予算規模が約1兆円となり、世界銀行に次ぐ世界第2位の援助機関となりました。当然のことながら世界の注目と期待は集まり、今までにも増して、明確な援助方針と具体的な成果が求められることにもなりました。

この統合により技術協力、有償資金協力、無償資金協力の3スキームが一つの機関に集約され、スキーム間のより有機的な連携やより効果的なアプローチによる援助の実施体制が整えられました。例えば水道人材育成計画(技術協力)と上水道整備事業(資金協力)の融合、農業普及人材育成計画(技術協力)と農村インフラ電化事業(資金協力)の融合など様々な可能性が膨らんできています。

しかし、ここで我々 J I C A 事業に携わる人間が肝に銘じなければならないのは、この3スキームの統合で目指すべきゴールは今まで J I C A が担ってきたことと変わることがなく、途上国における「人材育成」であるということです。学校や病院を建てても、それらはいくまでも手段であり、そこに従事する途上国の人材が育っていかなければ、私たちの目的は達成されたとは言えません。



また、言うまでもないことですが、インフラを整備し組織をつくり制度をつくるのはあくまでも「人」であり、またその国の発展を担う「人材育成」に貢献しうるのは、やはり「人」であるということですから。つまり「国際協力人材」であり、中でも協力現場で活躍される「JICA専門家」の方々なのです。JICA専門家によるプロフェッショナルな技術の移転があつてこそ3スキームの統合は推進され、また明確な計画のもとにその過程（プロセス）の管理が行われてこそ「人材育成（人づくり）」が主導されるのです。

これまで30年以上、JICAは、「人づくり、国づくり、心のふれあい」のスローガンのもと、技術協力を展開して参りました。多くのJICA専門家の方々が、日本人ならではの技術と技術者魂をもって、まったく生活環境の異なる途上国において、異なる言語を用い、途上国の関係者との信頼関係を構築しつつ業務を実施してきたことは、並大抵の努力ではございませぬ。しっかりとした理念・哲学、確実な技術、たゆまぬ努力があつたればこそ成し遂げられたものだと理解しています。

技術協力の成果としては、カウンターパートの能力向上、あるいは相手側機関の組織強化や制度整備などいろいろとあるのですが、実は、それらの成果に至るプロセスにおいては、目に見えない形で多くの努力、苦難、辛酸などがあつたはずで、本冊子では、技術協力の途中でJICA専門家の方々が目の前にある困難をどのように捉え、どのように立ち向かい挑

戦していったのか、またどのようにしてそれらを克服していったのか、その努力の軌跡を語り継ごうとしています。

今、途上国での困難に直面している方々、またこれからチャレンジをしようとする準備している方々に、大いなるヒントと勇気を与えられればと思つて本冊子を取りまとめました。

最後に、本冊子が国際協力における有効な指針となり、また有益なJICA専門家の記録となることを期待しています。

平成21年6月

国際協力人材部長

大石 千尋

「JICAプロフェッショナルの挑戦」(シリーズ1〜4)は、おかげさまで、関係各方面から高い評価を頂くことができました。まずはこのような評価をお寄せ頂いた読者の皆様に厚くお礼申し上げます。代表的なコメントとしまして、研修受講者の方がたからは、「技術協力プロジェクトやJICA専門家の役割の具体的なイメージが掴めたこと」、JICA職員からは、「技術協力の役割を再認識することができたこと」、また一般の読者の皆様からは、「ODAでもこのような良いことをやっていたことが理解できたこと」、などが挙げられます。さらに、このシリーズ1〜4の冊子の「はじめに」で紹介させて頂いた「『ダショー西岡』の話も大変興味深く読ませてもらいました」、と言うコメントも多く頂きました。

「ダショー西岡」の西岡京二氏(1992年に亡くなるまで、ブータンで28年間のJICA専門家活動を継続された)の奥様・西岡里子さんより送付頂いた西岡さんとの共著『ブータン・神秘の王国』(1998年、NITT出版)の中の「追記」部分に、ブータンでの西岡さんの葬儀の様子の記述がありましたので、その抜粋をご紹介します。

「・・・3月26日、主人の葬儀がパロの谷を見下ろす丘で盛大に行われた。王家の方々、政府の高官がティンブーから出席して下さった。この国であんな長い車の行列を見たのは初めてであった。親しかった大臣が村人達とともに柩を乗せた車に同乗され、ずっと泣いておられるので、娘と私のほうがどうしてよいかわからず、12時間にも及ぶ葬儀を夢中で過ごした。パロ谷はその日、抜けるような青空で、桃の花が丘一杯に咲いていたのを憶えている。・・・」

この西岡ご夫妻の共著は、今回初めて読ませて頂きましたが、非常に読みやすく臨場感溢れる内容のものでした。1960年〜1970年代のブータンの様子が克明に、しかもリアルに記録されています。ある方の勧めで、西岡さんの奥様にも前回の冊子を送付させて頂いたところ、奥様より丁寧な礼状と共に、この著書を送付頂きました。

特に、この「追記」部分は、「神祕の王国」（1978年、学習研究社）を加筆・修正した際に加えられたもののように、奥様がその後のご主人やブータンの様子を描いたものです。また、この「追記」には、西岡さんの技術協力について語った記録も含まれていますので、その中から、これから専門家として活躍される方がたにも役立ちそうな記述を一つだけご紹介しておきます。

「今はいろんなことをやってきているし、村人の顔もよく知っていますから何でもすぐ信用してもらえますけれど、最初来たときは、外国人の若造が何も責任なしに勝手なことを言っただけなんです。聞いてもらえないこともたくさんありました。最初に仕事を始めるとき、どこにスイッチを入れるかが大切でしたね。農民の気持ちをどう変えるか、どこまで変わるか、新しい技術を導入して仕事をしてもらうか、そのためのスイッチを見つけるのが一番大切ですね、今から思うと」

ブータン人から尊敬されていた西岡さんでさえも、業務開始の段階においては人並みに苦労をされていたようですし、どの「スイッチ」を入れるべきかでも相当悩まされていたようです。現場に根ざした適正な技術を通じて、相手の考え方を変えてゆくことが、いつの時代においてもJICA専門家には求められているのです。また、そのためにも、人と人との繋がりを大切にし、信頼関係を構築していくことが特に重要となるのです。

筆者は、西岡さんの生涯を理解することにより、改めて国を越えた人と人との繋がりの大切さを感じています。「人づくり」による「国づくり」への貢献、人と人との信頼関係を通じた二国間関係の強化への貢献というものが、本来ODAに最も期待されているものではないかと改めて考えさせられました。

このような観点を踏まえつつ、今回の「JICAプロフェッショナルの挑戦」（シリーズ5〜8）の冊子作成に際しては、過去にJICAが実施した数多くある技術協力プロジェクトの中から、長年継続的な協力を行い、社会・経済的にも大きな開発効果（インパクト）をもたらし、相手国にも大変感謝されているものから選定しました。具体的な選定に当たっては、分野的にも異なり、インタビュ対象専門家の確保が可能である中から、アジア地域から2プロジェクト、アフリカ地域から2プロジェクトを、以下の通りに選定しました。

但し、これらプロジェクトは、いずれも、それぞれが複数のフェーズからなる技術協力プロジェクトから構成されている案件であるため、ここではまとめて「関連プロジェクト」として呼んでいます。

シリーズ5：「インドネシア・スラバヤ電子工学ポリテクニック（E_EP_IS_S）」関連プロジェクト（フェーズ1、フェーズ2）

シリーズ6：「インドネシア・母子（健康）手帳」関連プロジェクト

（フェーズ0、フェーズ1、フェーズ2）

シリーズ7：「ケニア・中等理数科教育強化計画（S_MA_SS_E）」関連プロジェクト

(フェーズ1、フェーズ2、フェーズ3)

シリーズ8：「ザンビア・ザンビア大学獣医学部」関連プロジェクト

(フェーズ1、フェーズ2、フェーズ3)

特に、シリーズ8である本冊子は、南部アフリカの獣医学分野で中核的役割を担うザンビアの「ザンビア大学獣医学部」関連プロジェクトを取り上げることとしました。25年前に、国内に全員で10名程度、そのうちザンビア大学教官としては2名しかいなかったザンビア人獣医師は、現在国内獣医師200名以上及び大学教官36名が、ほぼ全てザンビア人に置き換わっています。

しかしながら、ザンビア国内の獣医師を育成するばかりではなく、近隣諸国からの留学生も受け入れられる大学へと発展してきた背景については、残念ながらほとんど知る日本人がいないのも現実だと思います。

実は、この獣医学部の発展には、25年にも及ぶ我が国のODA（政府開発援助）による長い協力の歴史があったのです。また、この獣医学部を運営する教官の育成や組織強化のために、JICA専門家による地道な技術協力が大きな役割を果たしてきたと言えるのです。

本冊子では、この一連の技術協力プロジェクトに関わった長期・短期のJICA専門家全

員に登場してもらうことは、紙面の都合もあり残念ながらできません。

そこで、この一連のプロジェクトの最初から最後まで国内支援委員会の委員及び委員長の間で関わってこられた北海道大学名誉教授の金川弘司氏には、プロジェクトの立ち上げ時期を含めて、まず国内支援体制の観点から語ってもらいました。

次に、一連のプロジェクトにおいて、最も困難な時期であった獣医学部の立ち上げ期（フェーズ1）に業務調整員として関わり現在JICA理事の橋本栄治氏、また、同時期に短期専門家として関わられた見上彪氏に、それぞれフェーズ1の長期・短期の専門家の代表として登場してもらい、当時の専門家活動の全容を語ってもらいました。

また、留学から戻り、カウンターパートがようやく定着し始めたフェーズ2の後半に関わられた長林俊彦氏、同時期に業務調整員として関わったJICA職員の花井淳一氏、さらに、同時期からフェーズ2終了後も、個別専門家として残られた門平陸代氏に、それぞれ当時の専門家の代表として登場してもらい、専門家活動の全容を語ってもらいました。

最後に、しばらく間をおいたものの、実質的にフェーズ3に相当する発展的なプロジェクトに関わった蔵田團果氏に、その後の獣医学部の発展の様子なども含めて、新たな展開を語ってもらいました。

本冊子は、JICA国際協力人材赴任前研修の副教材としての利用を主目的として作成しました。また、できるだけJICA専門家の実像が等身大で見えるようにも試みました。特に、初めて赴任される専門家が、技術協力プロジェクトをイメージしやすいように、また、JICA専門家の活動の様子などが理解しやすいように、さらに過去のJICA専門家の教訓や知見がにじみ出るようにも取りまとめたつもりです。

例えば、ある専門家が圧倒的な技術力（世界的スタンダード）で実際にやって見せ、カウンターパートに理解を促したり、ある専門家がカウンターパートの話をじっくり聞いた上で対話を行い、彼ら自らが問題解決できるようになるまで忍耐強く寄り添ったり、また、ある専門家がカウンターパートと共通の理念をとことん語り合い、自分たちの役割の再認識に努めたり……。本冊子を読んで頂ければ、このような専門家にとっての重要な示唆をいくつも読み解くことができる筈です。

普通の日本人専門家がJICA専門家として、途上国で何を考え、どのように挑戦していったのかを理解する観点からも、ぜひご一読願えれば幸いです。本冊子は、広く開発教材として活用することも念頭におき、できるだけ読みやすい内容に絞って作成しました。多くの国民の皆様にも、ぜひご一読頂けることを願ってやみません。

本冊子の作成に際しましては、前回同様に「JICAプロフェッショナルの挑戦」執筆・編集タスクを設置し、企画から、プロジェクト選定、専門家らへのインタビュー、現地確認調査、原稿執筆（テープおこしを含めて）、編集まで一貫して、執筆・編集タスクが中心となつて担当してきました。

最後になりましたが、執筆・編集タスクを代表し、本冊子の作成にあたり、快くインタビューに応じて頂き、かつ原稿に細かく目を通し数多くのコメントを頂戴し、貴重な写真までご提供頂いた専門家の皆様方に深く感謝申し上げます。また、突然の訪問にもかかわらず、快くご対応頂いたザンビアの政府関係者及びプロジェクトの関係者の皆様方にも、改めて感謝申し上げます。さらに、本冊子作成に際し、ご協力頂いたその他多くの関係者の皆様方にも感謝申し上げます。

平成21年 6月17日

JICA国際協力人材部 執筆・編集タスク主幹

鈴木 康次郎

目次

はじめに 1

執筆・編集タスク主幹より一言 5

プロジェクトサイト地図 15

第1部 プロジェクトの開発効果（インパクト） 16

ザンビア主要指標一覧 21

第2部 JICA専門家等へのインタビュー 22

・金川 弘司 氏（担当分野・国内支援委員会委員／委員長） 23

・橋本 栄治 氏（担当分野・業務調整） 53

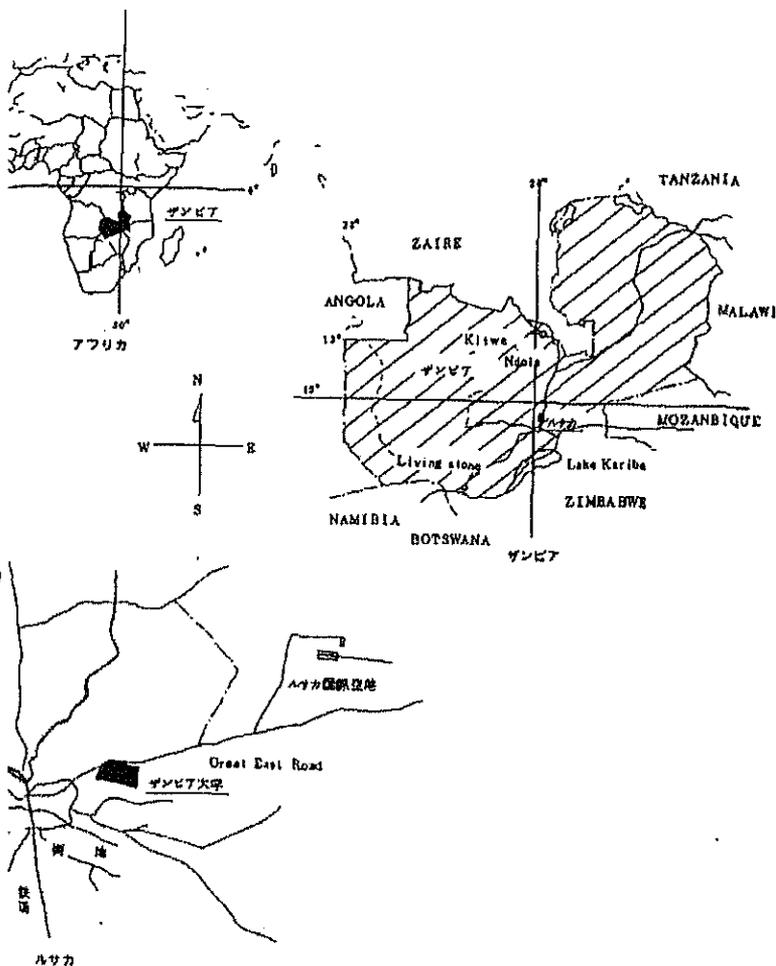
・見上 彪 氏（担当分野・鶏病学） 85

・長林 俊彦 氏（担当分野・細菌学） 103

・花井 淳一 氏（担当分野・業務調整） 123

・門平 陸代 氏(担当分野・疫学)	143
・蔵田 團果 氏(担当分野・畜産衛生／業務調整)	177
ザンビアの畜産事情	199
第3部 カウンターパートからの手紙	200
・ハリソン・チタンボ (Harrison Chitambo) 氏(ザンビア大学獣医学部教官)	201
ザンビア案件配置図	207
第4部 ルポライター田中章義の現地レポート	208
おわりに	217
参考資料	i
・関連プロジェクトの概要	ii
・関連プロジェクトの主なヒストリー	viii

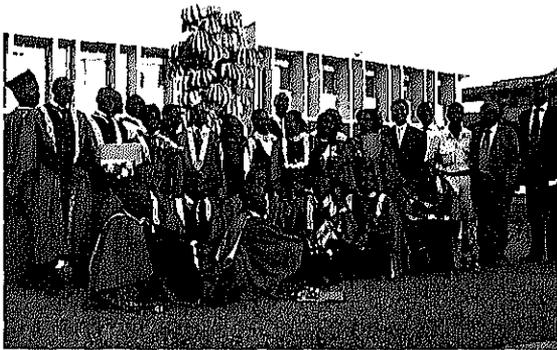
プロジェクトサイト位置図



ザンビア大学獣医学部技術協力計画 評価調査団報告書より抜粋

第1部

プロジェクトの開発効果 (インパクト)



2007年の獣医学部卒業式

第1部 プロジェクトの開発効果（インパクト）

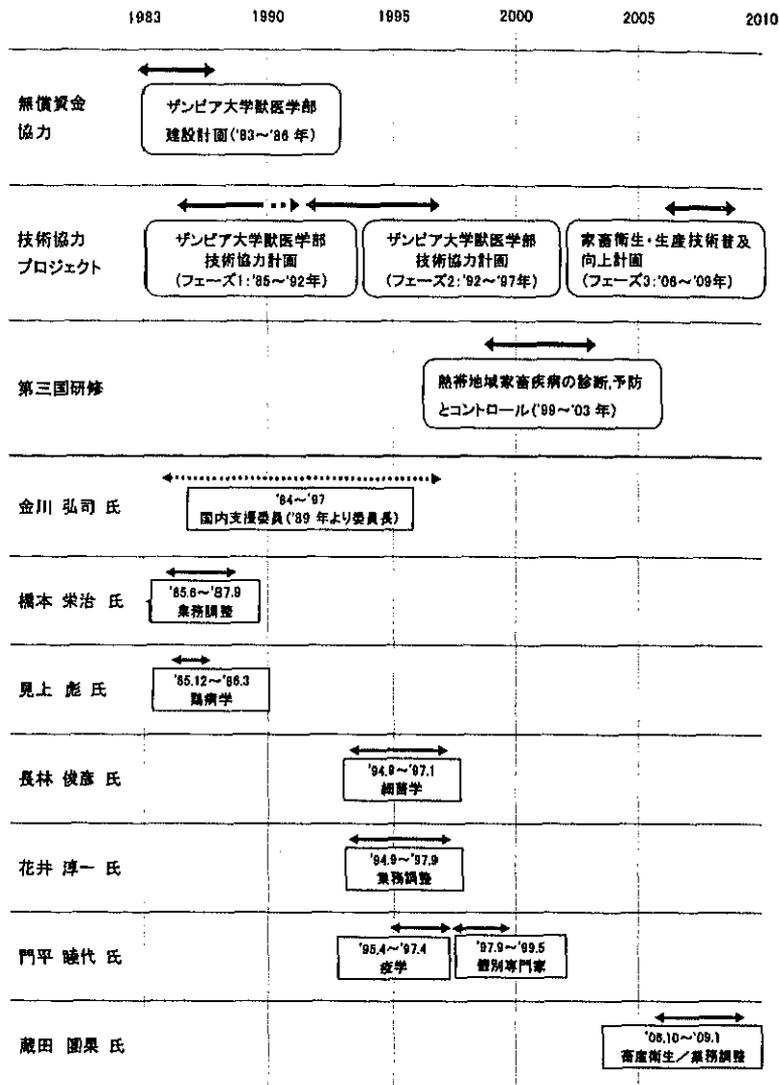
ザンビアの「ザンビア大学獣医学部」における一連の我が国の協力は、図1の通りである。それぞれのプロジェクトの概要は、本冊子巻末の参考資料を参照して頂きたい。

図1のように同獣医学部に関連して、我が国の無償資金協力が1回、JICAによる技術協力プロジェクトが3回、第三国研修が1回実施されてきている。また、技術協力プロジェクト（フェーズ2及び3）間に個別専門家が派遣され、青年海外協力隊（JOCV）とも緊密な連携を実施してきた。最近では、JICA以外の我が国の技術協力も実施されてきている。このことは、同獣医学部との協力が開始して25年に及ぶ期間を通じて、ほとんど途切れることなく、我が国のODAによる協力、とりわけ技術協力が実施され続けてきたと言いうことである。

その結果、同獣医学部は、ザンビアにおいて、教育的、獣医学的、社会的、そして国家的に大きな開発効果（インパクト）をもたらしてきた。

具体的には、25年前前のプロジェクト開始当初には、全国に10名程しかいなかったザンビア

図1. 「ザンビア大学獣医学部」に関する一連の協力
 <併せて、インタビュー対象専門家の派遣期間（主に長期）を下記に記載>



※技術協力プロジェクトにおいて、実線は本体協力、破線はフォローアップ協力を示す。

(JICA 各種報告書に基づき作成)

人獣医師が、2007年には284名の規模に達しており（そのほとんどは同獣医学部の卒業生）、その内200名程度は、農業省の各地の獣医（行政）官として活躍している事実に見られている。

同獣医学部でも、開始当初ザンビア人教官は2名で、他は、全員外国人教官であったが、現在では36名までに増え（内30名が同大卒）、1名を除き、全員ザンビア人教官に置き換わっている。現在、同学部長は第1期の卒業生であり、また副学部長2名も同大卒である。

これらの教官である教授や講師などのほとんどが、我が国を始めとする海外の大学で博士号あるいは修士号を取得している。特に、JICAの海外長期研修生や我が国文部省の留学生などとして来日した教官も多く、とりわけ北海道大学とは深い人的交流が現在でも継続しており、非常に親日的な獣医学部を形成している。

同獣医学部は、毎年35〜40名の卒業生を育成すると同時に、修士課程の学生も毎年2〜3名育成しており、第三国研修を契機として、南アフリカ、ボツワナ、ナミビア、マラウイなどの近隣諸国からも毎年若干名の留学生を受け入れている。

畜産振興の観点から、本年1月まで、フェーズ3に相当する技術協力プロジェクトが実施されてきたが、農業共同組合省との連携に基づき、地方の獣医官や獣医師補の育成に重点を置いた研修が実施されている。同獣医学部は、近隣諸国からの留学生の受け入れにも積極的

に取り組みと共に、南部アフリカにおける中核大学としての役割もますます期待されている。

ザンビア 主要指標一覧

	指標項目	1996年	2004年	2005年	2006年	2006年の 地域平均値
社会 指標等	地表面積 (1000km ²)	753	753	753	753	n.a.
	人口 (百万人)	9.5	11.3	11.5	11.7	781.3
	人口増加率 (%)	2.5	1.8	1.8	1.9	2.5
	出生時平均余命 (歳)	n.a.	n.a.	41	42	50
	妊産婦死亡率 (10万人)	n.a.	n.a.	830	n.a.	n.a.
	乳児死亡率 (1000人)	n.a.	n.a.	102.0	102.0	93.8
	一人当たりカロリー摂取量 (kcal/1日)	1,929	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.
	初等教育総就学率 (男) (%)	n.a.	105.3	117.8	117.9	99.3
	(女) (%)	n.a.	100.7	111.4	115.8	88.2
	中等教育総就学率 (男) (%)	n.a.	30.8	33.4	n.a.	35.3
	(女) (%)	n.a.	24.5	27.3	n.a.	28.4
	高等教育総就学率 (%)	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	5.2
	成人識字率 (15歳以上の人口の内: %)	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.
	絶対的貧困水準 (1日1\$以下の人口比: %)	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.
失業率 (%)	15.0	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	
主要 経済 指標	GDP (百万USドル)	3,270	5,525	7,349	10,886	737,758
	一人当たりGNI (USドル)	350	410	500	640	858
	実質GDP成長率 (%)	6.9	5.4	5.2	6.2	5.9
	産業構造 (対GDP比: %)					
	農業	17.6	23.0	22.1	20.9	16.5
	工業	34.8	27.8	29.9	32.9	31.5
	サービス業	47.7	49.1	48.0	46.2	52.0
消費者物価上昇率 (インフレ: %)	43.1	18.0	18.3	9.0	n.a.	
政治 指標	政治体制: 共和制					
	憲法: 1991年6月新憲法を制定。96年5月改正					
	元首: 大統領。ルビア・ブwezani・バンダ (Rupiah Bwezani Banda)。2008年11月2日就任。任期3年 (ムワナワサ大統領の任期中の急死にともなう補欠選挙により選出されたため、前大統領の残りの任期期間のみ在職)					
議会: 1院制。158議席 (直接選挙で150人選出、大統領が8人任命)。任期5年						
内閣: 大統領が議員から任免。首相なし。2006年10月9日発足						

注 ● 地域平均値はサブサハラ・アフリカの数値 (地域の分類はWDI2008年7月版による。但し妊産婦死亡率はユニセフの地域分類)

● 「人口」、「GDP」、「外国直接投資純流入額」及び「総外貨準備高」の「2006年の地域平均値」においては、地域の総数を示す

● 妊産婦死亡率の数値はWHO・ユニセフ・国連人口基金 (UNFPA) の評価を反映した推定値

● 就学率が100を超えているのは、学齢人口推計値と実際の就学データの間にずれがあるため

JICA国別主要指標2009年1月版 (<http://libportal.jica.go.jp/fmi/xsl/library/public/data/Index/Africa/Zambia.pdf>)より抜粋

第2部

JICA専門家等へのインタビュー



第1期生卒業式に出席した専門家ら



かながわ ひろし
金川 弘司 氏

**担当分野：国内支援委員会委員／委員長（フェーズ1）
国内支援委員会委員長（フェーズ2）**

1935年北海道室蘭市生まれ。北海道大学名誉教授、北海道JICA帰国専門家連絡会会長。帯広畜産大学獣医学科を卒業後、北海道大学（北大）大学院に進学。1963年獣医学博士号を取得し、北大助手となる。1967年から10年間、北米に留学し、世界に先駆けて胚（受精卵）移植の実用化を行う。1977年帰国し、北大助教授、教授、獣医学部長および留学生センター長を歴任。1983年の事前調査から、「ザンビア大学獣医学部技術協力プロジェクト」に関わり、国内支援委員会の委員長を勤めた。現在は、JICAと北海道獣医師会で実施する「産業動物獣医技術研修コース」のコースリーダーも務めている。

プロジェクトを実施するに際し、現地の専門家と国内の支援体制が車の両輪として上手く回らないと、人の派遣も研修生の受け入れもスムーズに進みません。そこで私たちは、まず各方面の協力を得て、国内支援委員会をつくっていきました。

1998年5月に取りまとめられた『ザンビア大学獣医学部技術協力計画・12年半の協力の軌跡』には、冒頭で、当時、国内支援委員会委員長を務めていた金川弘司氏の次のような序文が記されている。

「昭和58年（1983年）2月にザンビア大学獣医学部無償資金協力の基本設計調査団の一員として初めてザンビアの土を踏んで以来、ザンビア大学獣医学部の誕生からその成長まで、慈しみ育む気持ちで15年の歳月が経ちました。」

この間、各方面より多大のご協力・ご支援を頂きながら、平成9年（1997年）7月を

もってザンビア大学獣医学部技術協力計画が終了致しました。我が国から2万キロ以上も離れているアフリカ大陸の真っ直中に、北大獣医学部のそれと同じ規模でザンビア大学獣医学部を建設するという壮大な試みは、当初から計画通りスムーズにと言う訳にはいかず、数々の困難に遭遇しながら、我が国の獣医・畜産関係機関全域にまたがる皆様方のご協力とご理解を仰ぎながら計画の遂行に努めて参りました。

この計画に対しましては誠に多くの方々のお忍耐力とご尽力と適正なご助言を頂きながらアフリカでも有数な施設・設備を持ち、且つ優秀な人材を有する獣医学部として成長し、既に150余名の卒業生（新獣医師）を輩出し、成功裡に実を結ぶことができました。・・」

プロジェクトが形成された当初、教授になったばかりだった金川弘司氏も2009年2月で74歳になる。若い女性の間でベストセラーとなり、現在の獣医学部の半数が女性になるきっかけを作ったとも言われるコミック『動物のお医者さん』のモデルの1人にもなった金川弘司氏は、どのようなきっかけでこのザンビア大学獣医学部技術協力計画に携わることになったのだろう。「忍耐と努力」が座右の銘だという金川弘司氏のプロジェクトへの思いと挑戦を紹介してみたい。

プロジェクトの立ち上げに参画

「・私は、技術協力プロジェクトが立ち上がる前の、最初の調査からザンビア大学獣医学部への協力に参加していました。1983年2月の無償資金協力（無償）の基本設計調査からです。JICAからは無償部の担当者、北海道大学からは橋本（信夫）先生と私が行きました。本件は、ちょうど同じ頃、当時はまだ皇太子ご夫妻だった現在の天皇皇后両陛下が、タンザニアとケニアとザンビアを親善旅行された際に、ザンビア側から強い要請のあった案件だったそうです。

実は、その前年（1982年8月）に、ザンビアのカウンダ大統領が訪日し、日本政府に対して獣医学部設立のための無償資金協力と技術協力の要請をしていました。後日、文部省から北海道大学にも連絡がありました。それが確か1982年12月頃で、1983年の2月には、早速、私たちは無償の調査団として2週間ほど現地で調査を行いました。

初めて訪れたときは、首都のルサカにあるザンビア大学の敷地の一番片隅の、草がぼうぼうと生えているところを見せられ、ここに獣医学部を建てたらどうかと言われたのです。そんな原っぱを見せられて、「これで大丈夫かな」と思ったことを覚えています。橋本先生は米国に長くおられて、私もカナダに7年と米国に3年いて、欧米の獣医学部をあちらこちら

で見てきていましたので、国際的レベルに引けを取らない獣医学部をつくるべきだということになりました。

最初の2週間の滞在で、解剖・生理・病理・細菌の4つの研究室を柱にするという青写真を描き、ザンビア側にもそれを見てもらった上で、カリキュラムや教員・学生の人数規模などを一緒に決めていったのです。帰国後にJICAや北海道大学に提出した報告書には、無償資金協力に加え、技術協力による人材養成が必要とされていることも記載しました。それが受け入れられて、1984年の施設建設に続いて、1985年には5年間の「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト」がスタートしたのです。

獣医学部の建物が完成したのは、技術協力が動き出して1年後の86年です。当初は建物がなかったため、他の学部の教室を借りて獣医学の基礎的なことを教えていました。

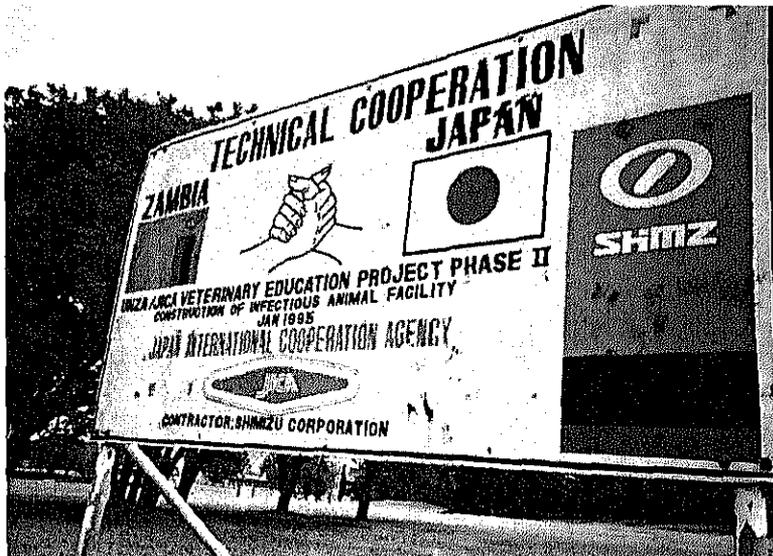
学生数は、北海道大学の規模を参考に各学年30人ずつと考えていたのですが、最初の頃は、まだ志願者が10〜20人程度でした。南アフリカの獣医学部を除いて、当時は赤道より南に獣医学部がなかったため、学生のうち10%ぐらいは近隣の国から受け入れるという案も出ていました。

一方、当時既にEUの援助で獣医学に関する南部アフリカの地域大学をジンバブエに設立することが決定していましたので、「EUがジンバブエにつくるのだから、ザンビアに獣医

学部は必要なのではないか」と言う声も聞かれました。それでも、私たちはもうザンビアと一緒に動き出していた時期でしたので、ザンビア大学獣医学部は国内向けの「ナショナルスクール」として位置づけました。

当初は教官集めに苦労しましたが、ザンビアはもともと英国の植民地でしたので、英国は協力的に人も送り、援助もしてくれました。初期にはザンビア人教官がほとんどおらず、日本人専門家だけでは全てをまかなうことができなかったのです。アイルランド、ベルギー、ドイツといったヨーロッパの人たちなどとも協力しながら講義をおこなっていました。

国内支援委員会をつくったのは、ザンビア側から技術協力をして欲しいという正式要請を受けてからです。北海道大学だけではとて



ザンビア大学獣医学部建設サイトに設けられた日本とザンビア両国の協力を示す立て看板

も対応できないので、全国の16の獣医系の大学や獣医師会・地方自治体などにもお願いをしていった経緯があります。プロジェクトはフェーズ2までだけを数えても12年間半続いたわけですが、その間おそらく200名近い日本人が専門家などとしてザンビアに渡っています。毎年、短期・長期専門家を7〜8人送り込まなければならず、この人選がとても大変でした。

また、ザンビアから合計50名程の研修員を受け入れましたが、これも北大だけではなく他の大学にも協力を依頼しました。私は、北海道大学を退官する前の3年間は、留学生センターの仕事に携わっていましたので、その間は何年かはザンビア大学獣医学部からの留学生の枠を2名分確保することができました。アフリカからの奨学生は、工学部や医学部なども含め日本の大学全体で10名程しか枠がないので、かなりアピールする必要がありました。そのため、この2名の枠はプロジェクトにとってはとても良かったと思っています。

10年間の海外生活の後、JICA専門家として活躍、そしてザンビアへ

私は学部は帯広畜産大学を出て、マスター（修士号）とドクター（博士号）は北海道大学

で取りました。そして、北海道大学の助手になりましたが、専門は人工授精などの繁殖学です。その後、カナダに留学しました。本当は1年間の留学という約束だったのですが、1年では英語も上達せず研究も進まなかったため、北大へ辞表を書きました。すると、「教授会の決定に逆らうのか」と教授にとても怒られたのですが、「公務員は2年まで海外出張が認められているから、もう1年留学延期をしても良いとの許可が出ました。しかし、2年目にまた滞在を延長したいと申し出ましたが、非常識ということで、結局北海道大学は2年で辞職し、今度はカナダの大学の研究員になったのです。

カナダに3年いた後、米国に3年行って、またカナダに戻って4年を過ごし、トータル10年間も海外にいたのです。だから本当はもう日本に帰ってくる気はなかったのですが、たまたま私が在職していた研究室の助教授のポストが空き、教授から帰ってこないかと言われました。私の子どもたちはもう海外の生活に慣れていましたので、日本に帰りたくないとも言っていました。息子が中学生、娘が小学生だったのですが、小・中学生の頃が最もネイティブに近い英語を覚えられる時期ですし、日本語も忘れてきていた頃です。子どもたちが帰りたくないというと、妻も子どもたちの意思を尊重し、結局私は単身赴任で帰国し、家族はカナダに置いてきました。

1年半ぐらい経ったら東京にいた友人が、国際基督教大学が帰国子女のための高校をつく

るといふ情報を知らせてくれました。そこなら息子も大丈夫かと思ひ、次の年の夏休みにカナダに迎えに行き、家族を日本に連れて帰りました。さつそく、国際基督教大学高校に入學希望の願書を出したところ、英語の試験でも良いとのこと、2週間ほどしたら合格通知を受け取ることができ、9月からの学期に入れることになりました。ただし、息子は日本ではまだ中学の年齢でしたので特別学生となり、翌年の4月から正規の高校1年生になりました。それはかえつて、息子には良かったのです。その間に専任の國語の先生を1人つけて、毎日國語の特訓をしてくれました。クリスマスに息子が先生に宛てた手紙を見たら、「私は先生が苦手です。だけどこの手紙を日本語で書けるのは先生のおかげです」と書いてありました(笑)。結局、日本に戻つてきても、2人とも日本にはなじまなくて、今、娘は米國に、息子はカナダにいます。

私の専門は胚(受精卵)移植というもので、米國の後に再びカナダに戻つたのは、牛の受精卵移植をコマーシャルベースで行う世界初のチームに参加するためでした。そのチームに加わつて4年間カナダにいました。

日本に帰つてきてから、このザンビアのプロジェクトの前に、パラグアイ・チリ・中國にJICA専門家として行つた経験もあります。そのときの専門分野は受精卵移植でした。パラグアイでは、家畜繁殖のプロジェクトを立ち上げるときに行き、チリでも同じような受精

卵移植のことで行き、中国は3年間のプロジェクトで行っていました。私は長期専門家ではなく、夏休みや冬休みの期間中に中国へ行き、後は大学院の学生などに行ってもらったり、中国側から来てもらったりしていました。長期で中国に滞在したのは、夏休みの約1ヶ月間だけです。

ザンビアの前にJICA専門家として行ったのはその3ヶ国です。その他、FAO（国連食糧農業機関）に依頼されてタイに行ったり、FAO本部で開かれた専門家会議にも行ったりしていました。また、文部省が実施していた協力でも東南アジアや韓国へ行った経験があります。1年に数回ずつ外国へ行くので、口の悪い同僚には「先生は給料をどこからもらっているんですか。JICAからですか、外務省からですか」などと皮肉を言われていました（笑）。10年間海外にいましたし、受精卵移植が専門だったので、要請はかなり多かったです。

教授になって間もなく、ザンビアのこのプロジェクトに行くことになり、同じ月に米国で学会もあって、以前から出席する約束をしていたので、米国に行ったその足でザンビアに行ったことを覚えています。米国の病院で、時間がないので黄熱病とコレラの予防注射を同時に打ってくれとお願いをしたら、そんなことはやったことがないと言われて、何か事故になっても責任は負わないということで、サインもさせられました。やはりその日には熱が出た

のですが（笑）。

アフリカへの夢と希望を持った教授がコミックのキャラクターに

ザンビアにいる間、週末に一番大きなカフェ・ナショナルパークに行ったことがあるのですが、その帰りに幹線道路で野牛のようなウオーターバックが何十頭も群れをつくって横切り、車が止まりきれなくてぶつかってしまったことがあります。自動車故障したので外に出たら、そこにツエツエ蠅がいて刺されてしまいました。私は、虫除けの薬にはアレルギーがあり塗っていなかったため、他の人は刺されずに私ばかりが刺されてしまった思い出があります。その日は、さすがに熱が出てしまいました。

見知らぬ英国人か誰かの車に乗せてもらって帰ってきたのですが、その日はたまたま日本に帰る前々日ぐらいで、大使館の夕食会に招かれていましたが、少し熱があるからと、当時のJICA国際協力専門員の緒方（宗雄）さんにひとりで出席して欲しいと頼んだのですが、20分ぐらいしたら迎えにきて、「先生がいないと夕食会にならないから、ちょっとだけでもいいから顔を出してください」と言われ、結局参加したことを覚えていきます。大使館の酒宴

がアルコール消毒になったのか、次の日にはさわやかに目をさました（笑）。健康には恵まれていたのでしょうか（笑）。

ザンビアには、北大でのスケジュールもあり長期では出られなかったもので、一番長くて1ヶ月ぐらい、短いときは2〜3週間ぐらいの滞在でした。一番初めの国内支援委員会の委員長は東大の名誉教授だった尾形（学）先生で、数年間委員長をされて体調を崩され、その後私に代わったのです。5年（フェーズ1）・2年半（延長）・5年（フェーズ2）とプロジェクトを実施したのですが、延長や継続のための署名をするときには委員長が行ってくれというので、何かある度に結局10回ぐらいザンビアへ行きました。

私が大学を出た頃、『砂漠は生きている』や『キリマンジャロの雪』など魅力あるアフリカ映画がたくさんありました。その他、資源のことから考えてもアフリカ大陸は将来がとて有望なところだと思っていました。だから、大学を卒業した頃、どこへ行きたいかと聞かれると私はいつも「アフリカ」と答えていたほどです。今もそう思っています。ただ、アフリカの一番の問題は内紛です。政治的な混乱、宗教的な混乱、部族間の争い。これはちやうど日本の戦国時代に似ているのではないか、と思っていました。豊富な資源に加え大きな川や湖もあるので、内紛さえなければ、灌漑を上手く利用することにより乾季も乗り越えられ、将来的には食糧の輸出国になれるのではないかと思っていました。



フェーズ1の終了時評価時、ザンビア大学代表者と握手を交わす金川委員長（右側）

乾季と雨季があるのですが、実は我々の北海道よりアフリカはずっと良い条件です。北海道は半年は雪の下になるため、この時期農業は何も出来ないのですが、日本の中では北海道は農業基地となっており、食糧の自給率も150%です。他方、アフリカは鉱物資源も多いし、土地も利用しようと思えば相当希望が持てると思うところだと思っています。このように当時から私はアフリカに夢と希望を持っていました。

このプロジェクトの話が北海道大学に来た当時、橋本先生も同じようにアフリカに思い入れを持っていました。橋本先生も若いときに長く海外にいたため、2人のコンビでなんとか実現させようと、無償の調査の帰りの飛行機では、ポジティブな報告書を書こうと相

談したことを覚えています。橋本先生は確かリベリアに2年ほどいたことがあるはずですが、橋本先生は公衆衛生が専門で、リベリアには赤十字か何かの仕事で行っていました。だから、橋本先生はアフリカの事情に精通していたのだと思います。

『動物のお医者さん』という漫画が、当時の女子高校生にはベストセラーとなったおかげで、今の獣医学部は半分が女性となっています。作中のキャラクターは、橋本先生と私を合わせたような感じなのです。私が教室で何かを言ったら、もう次の号にそれが出ていたりしました。私の誕生日は2月19日なのですが、学生たちが「かまくら」をつくってお祝いをしてくれたことがあります。すると、次の号にはそれも出ていました（笑）。

作者本人は直接取材には来ませんが、作者の妹さんは時々友人の学生たちから情報を受け取っていました。当時、研究室のコンパなどには友達でも恋人でも連れてきていいとオープンにやっていたので、色々な人が来ていたのでしょう（笑）。私が学生のときには、女性は1人もいなかったのに、とにかくこの漫画でずいぶん女性の獣医希望者が増えました。残念ながらこの漫画の中には、ザンビアのプロジェクトの話は出てこないのですが、アフリカが好きだということは出てきます。アフリカのお土産とか、アフリカのお面とかも登場していたようです（笑）。

国内支援体制とフォローアップ体制が効果的に機能する

このプロジェクトでは、国内支援体制が非常によく機能していました。プロジェクトを実施するにあたって、現地の専門家と国内の支援体制が車の両輪として上手く回らないと、人の派遣もできなければ研修生の受け入れもスムーズには進みません。私たちはまず、北海道大学だけではできないということを考えて、各大学や農水省、地方自治体などの協力を得て、国内支援委員会をつくっていきました。北海道大学の人間だけで固めずに、色々な大学や農水省・獣医師会からもメンバーになってもらったのが良かったのではないかと思っています。獣医師会の協力もあって、全国的な組織体制をつくってサポートして頂きました。

北海道庁もこのプロジェクトに2〜3名を出してくれています。また、長野県などからも数名が参加してくれましたし、もちろん農水省も各大学も人材を出してくれました。ただ、大学や農水省にお願いした場合の問題点は、現役の人たちを長期では出せないということ、1〜3ヶ月の派遣がほとんどでした。ところがザンビア大学は単位や学科の関係で、1年か2年はいって欲しいと主張します。そうなると思うことができるのは結局退官した先生たちになるので、私たちは退官間際の先生にポイントを絞り、参加のお願いをしていました。こうした経緯で、多くの退官した先生たちが長期専門家としてザンビアに行ってくれたのです。

日本には獣医系の大学が16大学あるのですが、私たちはその16大学全てにお願いをして、かなりの協力をしてもらいました。しかし、それでも北海道大学の関係者が多かったのは事実です。

日本で一番早く獣医学教育が始まったのは北大です。札幌農学校の時代から獣医学が教えられていて、その頃の先生たちはほとんどが外国人でした。農学部の中には畜産第1、第2という講座があつて、第2が獣医学科だったので。当時、帯広畜産大学と北大に獣医学科があつたのですが、終戦後米国から北海道に赴任してきた27〜28歳の若い獣医官が「小さな島に2つも獣医学科はいらない。札幌のような街よりも帯広にあればいいから1つにまとめるように」と言い出したのです。

北大の先生たちは、学科が潰されてはいけなないと、農学部から独立して獣医学部をつくらうと決めたのでした。こうして、国立大学のうち、北海道大学だけが獣医学部として独立したのです。それが昭和27年の出来事でした。

日本そのものが、実は欧米の技術を取り入れて学んできて、それを今度は国際協力の中で様々な形でフィードバックしています。ドイツに次いで、かつては日本が一番国際的な援助を受けていました。今の若い人たちは、こうした現実を認識しているのでしょうか。戦後の20年くらいは、日本は色々な形で援助を受けていたのです。日本の良いところはその20年間

で復興し、その後は援助する側にまわったという点です。

東海道新幹線も世界銀行から借りたお金でつくりましたし、払い終わったのは1990年7月です。戦後の復興のために、外国からずいぶん援助を受け、日本も真面目にそれを利用して復興してきたのです。だから、今我々が援助している国も、いずれそうなって欲しいと願っています。10年、20年我々が援助したら、後は自立してやって欲しいと思うのですが、現実にはなかなかそうはいかないようです。

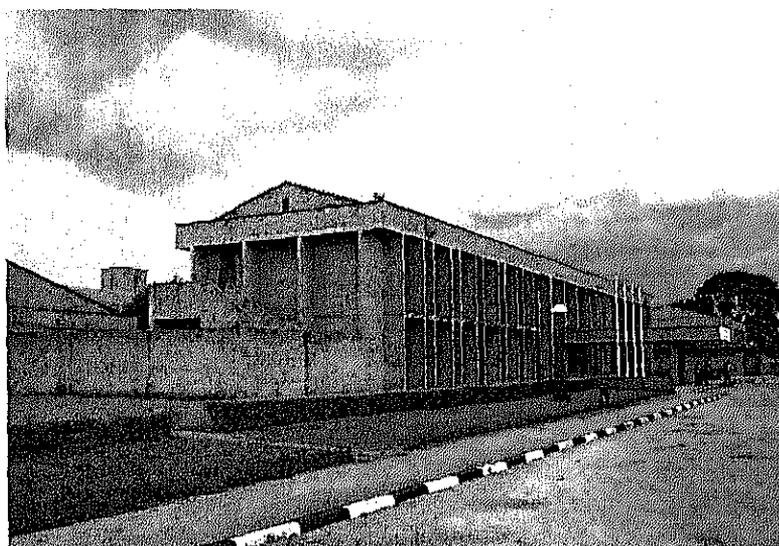
今回のプロジェクトは教育プロジェクトとして長く続いてきており、必ず日本人が行き来していて、何か不足があればそれを補ってきました。しかし、施設建設型の援助ではプロジェクトが終わってしまうと皆引き上げてしまうので、後でどこかがほんの少しまじりなだけでは、アフターケアのないままになってしまう可能性が高いようです。これは日本だけではなく、ヨーロッパが支援した家畜人工授精所を見に行ったときにも同じことで、機材が使用されずに眠っていたことがありました。

例えば無償の援助をしたら、その10%ぐらいはメンテナンスの費用として10年分ぐらいを確保できないものか、と前にも言ったことがあるのですが、それはなかなか難しいと言われたことがあります。JICAの現地事務所なり現地の大使館なりが、「そのプロジェクトのメンテナンストも面倒を見ます。そのためにお金を10%ぐらいは確保しています」ということ

ができたなら、ちょっとしたことでも、そのままになつていく機材を有効に使えるのではないかという気がします。

こうしたことにはJICAの関係者も気づいていて、フォローアップシステムというものをこの15年ぐらいかけて整備し、緊急対応してきているものもあるそうですが、あまりにも数が多すぎるので、人もお金もなかなか続かないということもあつて、順調に回すには時間がかかるようです。

現在、北海道大学ではザンビア大学との共同研究として、文科省経由のODA予算を活用した「人獣共通感染症リサーチセンター」を実施しており、2人の常駐者を3年間派遣しています。また、昨年までの4年間、夏休みに学生たちをザンビア大学へ送っていました。



ザンビア大学獣医学部正面玄関のある建物

さらに先生達が個別に文部科学省の科学研究費を申請して2件が通り、3年ずつ6年間人獣共通感染症に関するプログラムを実施してきました。

また、北海道獣医師会では獣医技術の研修コースを行っており、私も関係しているのですが、これは13年間続いていて、32ヶ国から83名の研修員を受け入れています。アフリカからも20〜30名が来ていますし、東南アジアからも南米からも20〜30名がそれぞれ来ています。もちろんザンビアからも参加してくれています。だから、ザンビアとの関係は、縁が切れることなく長く続いています。

ザンビア大学獣医学部のプロジェクト（フェーズ2）は、実際には1997年に終わっているのですが、その後も日本との関係は色々続き、今回のフェーズ3とも言える3年の新しいプロジェクト「家畜衛生・生産技術普及向上計画プロジェクト」も含めて、ずっと続いてきています。

ちなみに、ザンビア大学を卒業して北海道大学に来て1997年に博士号をとったアーロン・ムウイネ（Aron Mweene）さんが、今はザンビア大学獣医学部の学部長になっています。

通常のプロジェクトではカウンターパートがいて技術移転をするというのが一般的なのですが、このプロジェクトではカウンターパートがほとんどいなくて、カウンターパートとな

るような人たちを学生から育てていかなければならないという特殊なプロジェクトでした。

専門家でザンビアへ行く先生方には、ティーチングスタッフとして行ってもらおうということから話をしていましたので、向こうで自分の専門に関して直接学生に教えるという認識で行ってもらっていました。また、チームリーダーの先生方が向こうの学部長と密接に連携を取ってくれていましたので、こちらから送る人選に関しても、なるべく現地の要望に応えるようにと進めていきました。向こうから送ってくる留学生や研修員に関しても、この分野を日本で勉強させ、将来の教官にしたいといった要望を出してもらい、連携がしっかりと取れていたことが良かったのだと思っています。

私たちがチームリーダーを依頼した先生方は、このプロジェクトのことをよく理解されていきましたので、国内支援委員会とよく連携が取れていました。また、「北海道ザンビア会」という会をつくって、帰ってきた人たちと毎年1、2回は懇親会をやったり、ザンビアから留学生などが来たときには、招待をしたりもしています。そういった親睦があったことも、上手くいっていた要因だったのだと思います。全然知らない人同士の国内支援委員会や現地の専門家チームや、現地のJICA事務所では、これほど上手くはいかなかったでしょう。

実際、ザンビアから帰ってきた人のほとんどが「北海道ザンビア会」の会員になってくれます。「北海道ザンビア会賞」もつくって、数年前までは卒業式のたびに毎年1名ずつ

優秀学生を表彰しましょうということで、現地の学生と先生方に優秀な学生を選んでもらったこともあります。「北海道ザンビア会」の皆さんの会費から、金額にすれば1万円程度の副賞を出したのですが、彼らへのささやかな努力賞のようなものでした。

大学院構想を持って、南部アフリカの中核大学へ

私たちは、プロジェクト開始時にフェーズ3までの5年・5年・5年の15年間は必要だろうと考えていました。ところが結果的には、最後の5年は2年半に削られてしまったような形です。トータルとしてプロジェクトそのものは12年半にわたって行われました。事前の調査やフォローアップなどを入れると15年ぐらいにはなっているとは思いますが。

大学院構想に関してはだいたいぶもめました。ザンビアで開設すべきなのか、あるいは日本や英国でやるほうが効果的なのではないか、といった意見も出ました。ザンビア側としてはぜひ大学院をつくりたいということだったのでありますが、それを国際的なレベルに保てるのかというところで意見がまとまらず、国内支援委員会でも随分と議論になったことを覚えています。当初は、フェーズ2で修士課程をつくり、フェーズ3で博士課程もつくろうとしていたの

です。今ではほとんどの学生が日本や英国に留学して、博士号を取っています。ザンビア大学では未だに博士号を出していないと思います。トータル15年ぐらい協力を続ければ、後は何とか自分たちでやっていけるだろうと初めは思っていたのですが、なかなかそこまではいっていないように思います。

今のザンビアの教官のほとんどは、文部省の留学制度で日本に来た人たちです。北海道大学に対するアフリカからの留学生枠がわずかしかない中で2名ずつを確保していたのですが、プロジェクトが終わったらそれも終わってしまいました。あの枠で合計15名程度が北大にも来たと思います。ただ残念なことに、そのうちの3名ぐらいはエイズで亡くなってしまいました。

現在、留学生として北海道大学で博士号を取った10名程度の留学生が、ザンビアに帰って皆教官になっています。いい教官を育てられたということは、結果的には非常に良かったと思っています。やはり大学の場合は、良い教官がいなければ良い学生は集まりませんし、良い大学にもなりません。私たちは、人材の養成を行い、それが結実しているのです。先ほど名前を挙げたカウンタートパートのムウイネさんは帰るときに、「先生、将来僕は大統領になります」とも言っていました。彼らが今度は周辺国に手を差し伸べられるようになったら素晴らしいと思います。



家族と喜びを分かち合う第1期卒業生

南部アフリカには今、ザンビアとジンバブエと南アフリカにしか獣医学を学べる大学はないので、将来的にザンビア大学獣医学部には、南部アフリカの中核大学となって頑張つて欲しいと思っています。当初から我々が意図していたことも、国際レベルの獣医師の養成です。今も近隣の国から留学生を受け入れているので、将来はこの地域の中核となつてくれることを期待しています。それにはもう少し、ザンビアの国全体が力を持たないといけないのかもしれませんが。

畜産業がどんどん振興され、周辺の国に農産物を輸出できる力がついたら、さらに色々な要請が来るでしょう。

第三国研修の後に新しく立ち上がった「家畜衛生・生産技術普及向上計画プロジェクト

ト」では、畜産業の振興のために、ザンビア大学が獣医師たちを再教育するという形で動いているようです。最終的にはある程度畜産業が活気づかなければならないのかなと思っ
ています。特に途上国では農業、畜産業が非常に重要なので、今後はそこから入って
国づくりをしていって、それから工業などにいく流れなのだと思います。土地や資源はあ
るので、うまく利用していけばいいのです。彼らももう少し伸びて、輸出国になるくら
いに頑張ってくれば、本当の意味での『ザンビアナイゼーション』もさらに上手く
いくだらうと思います。

プロジェクトでは、学部の教官がほぼ全員外国人だったところを、いかにザン
ビア人の教官に置き換えていくかということとをずっと考えていました。そのためにも、
研修生や留学生を日本の全国各地で積極的に受け入れてもらったのです。

ありがたいことに、どこの研究室に頼んでも快く受け入れてもらえました。獣
医学部は、そういう意味では良いところだと思います。多分、今の日本の獣医学部の
教授や助教授はほとんどが海外留学の経験を持っているからなのかもしれません。

JICA 専門家に不可欠な資質——「誰にも負けない。俺がナンバー1だ」というぐらいの専門的な知識と技術を持っていること。また、協力するということを厭わないこと。アダプタビリティ（適応性）、フレキシビリティ（柔軟性）、コモンセンスがあること。さらに、伝達能力（語学）があること。最後に、健康であること。

JICA 専門家は、専門家というぐらいだから、まず専門的な知識がないと駄目です。「誰にも負けない。自分がナンバー1だ」というぐらいの専門知識と技術を持っていなければいけないし、もう一つは、協力することを厭わないという考えのない人では難しいものです。また、コモンセンスとして適応性と柔軟性が必要です。具体的には、日本のことを知らないと駄目だということです。特に外国に行った場合、色々な日本の現状を知らないといけないのではないのでしょうか。さらに加えれば、伝達力ということから語学力も必要でしょう。もちろんすべての前提は健康で、困難に立ち向かえるスタミナは不可欠です。

専門家としての資質を身につける一番良い機会は青年海外協力隊だと、私は思っています。彼らの中で専門家の素養を持つ人は相当いるのではないのでしょうか。あともう少しブラッシュ

アップするために、先進国に行くか大学院に行くことに目を向けてもらえれば、将来ももっとたくさんの人たちが、専門家として育つのではないかと思っています。JICA専門家だけでなく、国際機関の専門家にもなれるし、一般社会でも通用していきます。

そのためにも、毎年1000人も2000人も派遣している青年海外協力隊をもっと上手く活用できないものかと思っています。かつて、私の研究室から何人か隊員として途上国へ行っていますが、出発前には必ず「帰ってきたら大学院に入るか先進国へ留学すべき」と言っていました。協力隊は月に10万円程度の貯蓄をしてもらえますが、まだ20代の彼らにとつて帰国後の200万円程のお金は大金です。「帰ってきて、それで車を買ったり、ヨーロッパ旅行に行ったりするのでは無駄遣いだと思う。帰ってきたら必ず大学院に行くか先進国で学ぶべきだ」と私は言っていました。先進国と途上国の二つの文化を会得することは、人生において決してマイナスの要因にはならないと思っています。

もし大学院で1年間に1人当たり150万〜200万円の授業料がかかるというのなら、色々なところで出している奨学金にアプライしてみればいいと私は思っています。若いときに途上国でボランティアをするという彼らの精神は立派なのですが、それだけで終わってしまわないでほしいと思います。

最近途上国から来た研修員らに、クラーク博士と北大卒業生の新渡戸稲造の話をしたとこ

ろ、彼らは大変興味を持ったようでした。ある意味で札幌農学校に來た外国人教師と似たような立場で、日本の先生方はザンビアへ行っていたのだとも話しました。「青年よ、大志を抱け (Boys, be ambitious)」のように、若い人たちの中に残るようなキーワードとまではいかないかもしれませんが、新渡戸稲造が言ったような「兩國のブリッジになる」ことの必要性を私は語り続けました。もちろん、ただ単に日本とザンビアのブリッジというだけではなくて、国際的な形で考えてもらえれば良いというつもりで話をしました。

いつも講義の最後に新渡戸稲造の話をしていたので、広い意味で日本を理解するのに役立つというコメントをもらいました。そういう意味では専門家としての資質に日本



ザンビア大学正門横の看板前での金川委員長

の文化や歴史をよく知っていることも加えた方がいいのかもしれませんが、日本という国が、なぜこんなに急速に伸びたのかということも彼らに説明すると、なるほどとうなずいてくれるものです。

技術協力に生きがいを感じないような人は、専門家になることを止めた方がいいと思います。私は昔から途上国への協力は、将来どうしても必要になるだろうと思っていました。私たちの頃は青年海外協力隊がなかったので、先進国で語学が上手になったら、そういった国際協力に携わって働こうという気持ちがありました。米国にいたときも、ピースコー（米国平和部隊）経験者などの人たちと友達になって付き合っていました。日本は資源もないし人口の多い国です。地球規模で考えたら、今の途上国と言われる所の方がこれからは伸びるのではないかと思っています。

私は、北海道大学を退官してからは札幌で北海道JICA婦国専門家連絡会の会長もしていますが、最後にザンビアに行ったのは2000年です。プロジェクトが1997年に終わってから3年ほどが経っていたのですが、獣医学部の施設もあまりガタガタにはなっていないので安堵したことがあります。その後も科学研究費で日本人がザンビアへ行くなど、色々な形で協力が続いてきたので、これならいけるなという気がしていました。

私の年齢になったら、やはり若い人が育ってくれることがとても嬉しいです。学部長にな

つたムウイネさんや、JICA関係ではないのですが、もう1人私の教え子でフィリピン大学の学部長になった人もいます。マレーシアでは国立の研究機関の次長になっている人もいます。教授や助教授になった人や、研究機関や民間の団体に伸びている人もいます。北大にいるときに私の研究室で30数名の留学生を受け入れましたが、皆、自国の発展に寄与し続けてくれています。留学生センターの仕事も3年間やりましたが、当時は留学生全体で600人程いました。今は北大全体での受入れは800人近くになっているかもしれません。

そういう若い人たちが活躍してくれるのが、私にはとても嬉しいのです。国内外で様々な仕事をしてきましたが、やはり教育というものはとても素晴らしい仕事なのだと思います。・・・」



はしもと えいじ
橋本 栄治 氏

担当分野：業務調整（フェーズ1）

1950年福島県生まれ。独立行政法人国際協力機構（JICA）理事。宇都宮大学農学部卒業後、1974年に海外技術協力事業団（同年8月に国際協力事業団が発足し、現在の国際協力機構に至る）に入団。国際トウモロコシ・コムギ改良センター（CIMMYT：在メキシコ）での海外長期研修を経て、85年から2年間程ザンビア大学獣医学部プロジェクトの業務調整員を務める。その後、アルゼンチン事務所業務第二課長など各部管理職を経験し、企画課長、ケニア事務所長、アフリカ・中近東・欧州部長、理事長室長を経て07年10月より現職。

コミュニケーションがしっかりと取れるかどうかで
ことの成否が決まってくるので、認識を共有して
情報ギャップを解消するために様々な打ち合わせ
会議を定例化していきました。

現在、JICA理事を務める橋本栄治氏は、アフリカ・中近東・欧州部長だった当時、名古屋大学農学国際教育協力研究センターで行われた第3回オープンフォーラムで、次のような発言をしている。

「私はアフリカの在勤経験が2度あります。ザンビアとケニアです。アフリカはよく世界地図帳で見開きの1ページに出ています。あれは縮尺3600万分の1の地図です。日本列島を見開きで見られるような地図の縮尺は1000万分の1です。そういう意味では、アフリカというのは16分の1くらいこの尺度の大きさを我々はいつも見ておりますし、面積で比較すると、アフリカは実に日本の80倍もあるのです。アフリカという一つにまとまったもののように考えますが、その中は多様性に充ちているのです。正しく等身大のアフリカを知

った上で援助をする必要があるというのが、私のメッセージです。」

橋本氏はこうしたアフリカの「等身大」をわかりやすく解説するために、日本で最も大きな湖である琵琶湖（671km²）と、面積がその100倍もあるヴィクトリア湖の大きさを対比している。さらに日本で一番長い信濃川が367kmであるのに対し、ナイル川は6690km、ザイルル川（現コンゴ川）が4370km、ニジェール川が4180kmといった数値も紹介し、アフリカの大地のスケールの大きさを聴衆に解説している。

この広いアフリカの大地で、1985年からの2年4か月、ザンビアの首都ルサカで橋本氏は何を思いながら、「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト」に携わってきたのだろう。72の部族が国を構成するとも言われるザンビア。ジンバブエとの国境に世界三大瀑布の一つであるヴィクトリアの滝があるこの国での橋本氏の挑戦を紹介してみたい。

JICAに入り、専門分野を越えた国際協力を歩みだす

「・・・私は宇都宮大学農学部出身です。当時、農学科に拓殖学研究室があり、「拓殖」というのは世界に目が開けるものかなと思って、そこに行きました。この学部を出た人の

中には、その後南米に移住した人たちも多くなりました。私自身は移住をしようとは思っていませんでしたが、広く物事を捉えられるかなと思って、ここを選択したのです。

この研究室で一つの出会いがありました。JICAの前身であるOTCA（海外技術協力事業団）の専門家としてスリランカやタイで稲作の指導経験のある長田（明夫）先生との出会いです。農林水産省から大学に転進された方で、その方が私の卒業論文の指導教官になってくれました。私はこの長田先生の指導の下で「稲とトウモロコシの物質生産能力の比較」を卒業論文のテーマとして選び研究しました。稲はC3植物といって光合成のサイクルが一つ少なく、一方、トウモロコシはC4植物といって光合成のサイクルが一つ多いため、物質の生産増に結びつく可能性が高いと思い、稲とトウモロコシがどのように違うのかを1年間比較研究しました。

当時、長田先生のところには「海外技術協力」という月刊誌が毎月届いていたのですが、あるとき、先生にOTCA（海外技術協力事業団）が職員を募集しているので応募してみようかと言われたのです。それが、私がJICAに入るきっかけでした。OTCAは私が入ってすぐに国際協力事業団になり（1974年8月）、それから35年、私はJICA一筋の人生になりました。

1974年春にJICAに入ってからすぐ農業開発協力部というところに配属となり、最初に

担当したのがインドネシアのランポンの農業開発協力プロジェクトでした。これは九州と同じくらいの広さをカバーする開発プロジェクトで、日本のいくつかの商社が1万ヘクタールという大きな面積のコンセッション（利権）を得て、トウモロコシの栽培をし、開発輸入をしていたのです。当時はオイルショックの直後だったので、現地で合弁企業をつくって生産したものを、日本の食糧として輸入しようという大きな政策がありました。

一方、インドネシア政府の方も、当時は人口稠密なジャワ島からスマトラ島へ住民を移住させていたので、農業生産技術を導入してその人たちの生活を安定させる必要がありました。私はこのプロジェクトの稲作と畑作の本部担当者として、4年8か月にわたって働きました。現場のプロジェクトには、明治生まれの頑固なリーダーがおり、若い孫みたいな私が本部の担当者ということでしたが、ずいぶん遠慮することなく仕事をやらせてもらいました。

通常、技術協力は二国間協定や口上書交換などにに基づき実施されますので、約束事はきちんと遵守されなければいけません。専門家の派遣人数や機材供与、毎年の普及面積など、すべてが合同委員会（Joint Committee）で協議されていました。また、インドネシアのバナナスという援助窓口機関と合同評価を行い、日本の協力がプロジェクト地域でいかに効果を発揮しているのかという評価もしました。合同評価は全く初めてだったのでありますが、このときの経験がその後のプロジェクトの業務調整の仕事にも大きく活かされています。

このインドネシア担当の後は、海外長期研修でメキシコの「国際トウモロコシ・コムギ改良センター」という国際機関に勉強に行き、現地で2年間を過ごしました。このセンターではトウモロコシ部門に配属になり、各国の研究者たちと一緒に農家の圃場を借りて改良品種の栽培技術を確立する仕事をしました。当時、小麦部門にはポーローグ (Norman Borlaug) さんという、小麦の品種改良で「緑の革命」を起こし、ノーベル平和賞（1970年）を受賞された方がいました。この人から開明的な影響を受けたと思います。

ここには私自身が希望して行つたのですが、大学に行つて象牙の塔で勉強するよりも、効果的な援助をするためにはもっと実践力が必要だと思つていましたので、良い選択だったと思つています。この頃は専門家になりたいという希望も持っていたのですが、やがてトウモロコシには一切触らずに、今ではすっかり食べるだけの人になってしまいました（笑）。

そんな私のJICA人生の転機となったのは、メキシコから帰つてきてから国際協力総合研修所をつくるという組織内プロジェクトに携わつたことです。当時は縦割り行政の中で農林水産省から来た部長や理事、通産省（現経済産業省）から来た部長や理事が、それぞれの省との繋がりの中で業務をしていました。けれども実際の現場で活躍されている方々は、そういう縦割りの行政と繋がっているというよりも、ライフワークでこの仕事をしたいと思つている人たちや青年海外協力隊（JOCV）のOB・OGの方がたも多数おられました。こ

うした方がたに何とか国際協力の現場で名譽ある地位を与え、日の当たるようにするのがこのプロジェクトの大きな眼目であったと思います。

また当時は、JICAの調査団が海外に行くといつも同じことを尋ねると揶揄やゆされていた。「人口や面積はどのくらいか、雨はどのくらい降るか、などをいつも尋ねてくる。前の調査のときに資料を全部渡したので、そのくらいは勉強してから来い」と調査のたびに言われたものです。こうした情報を「オールJICA」として取りまとめるところとして、研修、調査・研究、図書館・情報、国際協力専門員という4つの柱を持った国際協力総合研修所をつくらうというプロジェクトが実施されたのです。果たして1983年に国際協力総合研修所（国総研）が設立されました。これは私にとつて達成感の得られる仕事でした。

その後も国総研の調査研究課に配属され、1年2か月ほど勤務しました。調査研究課は当時、課長と課長代理と私の3人しかいない課だったのですが、総裁等に言われていたのは、JICAは宝の山にいながら自分たちの宝に気付いていないということでした。専門家の報告書や協力隊員のレポート、調査団の報告書の中には貴重な情報が入っています。それをどうやって次の技術協力プロジェクトなどに活かしていったらいいのかということを、もっとシステムチックに考える必要があるのではないかと言われていました。

そのためまず私がやったのは、技術協力プロジェクトの事例研究のための専門家用の活動

報告書のフォーマットを改訂したことです。技術移転がどうなされたのか、どれがうまくいってどれが失敗したのか、A国とB国では同じアプローチはできないのでその違いを分析できないのか、などと100人ほどの専門家に同じフォーマットで技術移転の活動事例報告をつくってもらい、その結果を研修に活かしたり、次の調査研究の材料に使ったりしました。情報があちらこちらに分散していたので、現在の技術協力プロジェクトの共通マニュアルの作成を企画部と一緒にやっていました。

国総研の所長からザンビアのプロジェクトに業務調整員として行くように言われたのは、ちょうどその頃でした。当時はまだザンビアがどこにあるのかすら一般的に知られていないような状況でした。私のアフリカ経験は、それまでタンザニアには一度だけ出張したことがあったのですが、ザンビアは全く初めての国でした。

ちなみに私の最初の出張は入団して2年目の終わりに行った韓国です。農業研究協力が目的でした。当時、韓国はまだ食糧自給を達成していなかったもので、日本の研究者から技術移転を受けて米の自給を達成したいと、とても一生懸命だったことを覚えています。

プレッシャーを感じながらも、業務調整員としてザンビアへ赴任

大地が緑に覆われていたというのが、飛行機の上から見たザンビアの第一印象でした。ルサカは空が青く、1300メートルの高地なので、空気がとても澄んでいました。

ザンビアではトウモロコシの粉をお湯の中に入れてマッシュポテトのようにした「シマ」が主食でした。アフリカのことを良く知らなかった私は、現地で病気になるって万が一のことがあっても、その前に日本食を食べたいと思い、30キロの米を日本から持っていったほか、日本人会をおして入手したマラウイ米やカリフォルニア米にも助けられました。幸いなことに妻が農芸化学専攻だったため味噌などをつくるのが得意で、現地で味噌や豆腐や納豆をつくってくれました。鶏も飼っていたので、玉子かけご飯も食べていました。

現在の天皇陛下が皇太子時代の1983年3月に妃殿下とご一緒にザンビアを訪れて、そのときに先方から最優先の要請案件とされたプロジェクトが、この獣医学部プロジェクトでした。そのため失敗できないプロジェクトだというプレッシャーを日本出発前から強く感じていました。FAO（国際連合食糧農業機関）の調査レポートでは、当時のザンビアの人口が約600万人で、約300万頭の牛がいると言われていました。そのうちの半分が企業的な牧場で飼われていたものですが、残りの半分は小規模農家で飼われている牛でした。当時



執務中の橋本業務調整員

のザンビアでは嫁をもらうために結婚の持参金として牛が数頭必要だと言われていて、畜産というよりは財産として牛が飼われていました。英国が統治していたので牛肉を食べる習慣もありましたが、家畜の伝染病対策が大変な問題でした。

当時のザンビアの周辺は政治的に難しい地域でした。南アフリカがまだアパルトヘイト（人種差別政策）をやっていた頃でしたし、ジンバブエは白人政権から独立したばかりで、元に戻らないようにしなければいけないという国際政治的な注目もあったと思います。また、反アパルトヘイトの共同戦線として1980年に結成されたSADC（南部アフリカ開発調整会議）にザンビアも加盟していました。こうした緊張感の中で援助をしていくという状況でした。ザ

ンビアに赴任した頃はジンバブエとF A O（国連食糧農業機関）との関係についての情報が全くなかったので、なぜF A Oがザンビアに来ないのかがわからず、アイルランド人の学部長、その後英国人の学部長と共に、教官の確保に大変な苦勞をしたことを覚えています。

ザンビアが独立したのは、1964年の東京オリンピックの年です。10月10日の開会式には北ローデシアとして行進して入場し、10月24日の閉会式ときには閉会式と独立記念日とが重なっていましたので、ザンビアの国旗を首に巻いて独立を喜び、国立競技場を一周したザンビア選手の姿がテレビに流れました。私はそれをとてよく覚えていて、その話をするときザンビアの人たちはみんな喜んでくれました。

私が赴任していた当時は独立してまだ20年くらいで、大学の先生には外国人が大勢いました。協力隊員が鉱山学部の講師を任されているような時代でした。

このプロジェクトにも青年海外協力隊（J O C V）の方がたが入っています。しかしザンビアの教育制度に関する理解が不十分なままスタートしてしまったのかも知れません。ザンビアでは、テクニシャン（技官）が大勢いて、実験材料を集めたり実習をしてくれたりする制度になっており、技官がいなければ自分たちは教えられないというのがその当時のザンビア大学の先生方の考え方でした。そこでプロジェクトでも日本人の技官を入れようという話になったのですが、技官として専門家を入れるととてもお金がかかってしまうので、5人の

JOCVの隊員を助手（Teaching Assistant）として入れることになりました。

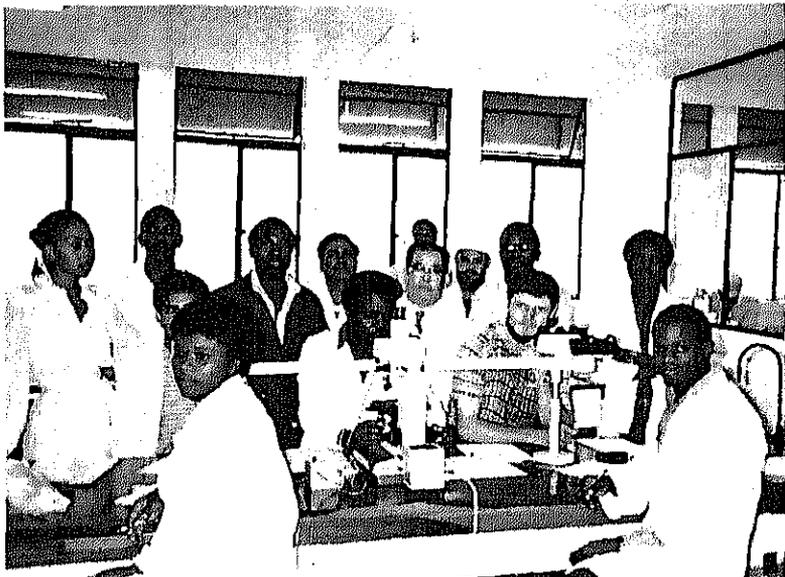
けれどもJOCVの隊員が来たときには、既にテクニシャンがいましたし、アカデミックスタッフもいましたので、彼らの役割が中途半端になってしまい、この部分での隊員派遣は長くは続きませんでした。

他方で、ザンビアにはプロジェクトが始まる前から家畜保健所などに協力隊員が入っていました。当時ザンビアで活躍していた70人の獣医師の中には数名の獣医師隊員がいました。彼らは現場で実際の診断や予防にあたっていました。協力隊員は獣医師の免許を持っていたので、実際の診療活動ができていたのです。

「ザンビアナイゼーション」——ザンビア人によるザンビア人のための
大学運営を目指して

プロジェクト実施期間は5年として始まったのですが、インターナショナル・スタンダードに揃えていたため、2年間の教養学部の後、3年生から4年間の獣医学教育をすると卒業までに6年がかかります。ぎりぎりのタイムスケジュールの中で本当に5年間で終わらせら

れるのかというのが、初代の石谷（類造）リーダー始め当時の専門家たちの悩みでした。そのため、プロジェクトの目指す「自立発展」の「自立」とは何のことを指すのだろうかと私たちは一生懸命に考えました。例えば、ザンビア人が獣医学部長になれば自立したと言えるのか、4つの講座主任のうちの半分以上をザンビア人が担えば自立したと言えるのか、などなど。そうした問題意識があつて、ザンビア人教官によるザンビア人獣医師を育てる自立体制の確立を目指す「ザンビアナイゼーション（Zambianization）」という概念が大事だということになったのです。学部長や講座主任になるには博士号が必要なので、では学位をどう取らせるのかというのが私の任期後半の大きな課題でもありました。学位



学部の第1期生と石谷リーダー（中央の日本人）

修得のために、とにかく日本に研修員を送り出しました。

スタート時点の教授陣の国籍は全部で14か国でした。ほとんど国際機関のようなもので、それを100%ザンビア人で担える形にするにはどうしたら良いのかと常に考えていました。現在も含めて14か国の国籍の人たちが同じオフィスで仕事をしているというJICAのプロジェクトは極めて稀だと思います。

プロジェクトでは、予め2講座の講座主任を日本人が務めるということだけは決まっていたのですが、確保した獣医学部の教官はポーランド人、タンザニア人、ガーナ人、モロッコ人、英国人、アイルランド人、エジプト人などといった人たちでした。例えば、タンザニア人はザンビアに出稼ぎに来ていて、給料は300ドルくらいだったと思います。単純な比較は誤解を与えてしまう恐れがありますが、日本人の専門家はその10倍ぐらいの手当でした。日本人の専門家を1人派遣する経費と10人の外国人教官を雇う経費がほぼ同額なのです。そのため当時は教官の確保のあり方を整理することにずいぶん悩みました。タンザニアでは150ドルしか給料をもらえないので、150ドルを送金できるというのが彼ら外国人教官の考え方でした。

ザンビアに行ったときはカウンターパートがほとんどいない状態からプロジェクトがスタートしましたが、学生が育って、その人たちが教官になっていくということを見据えながら

プロジェクトを進めました。また、我が国の無償資金協力による建物は私たちが行ってから1年半後に竣工しましたので、最初は鉱山学部の間借りをして、空いている教室を使って授業をしました。

ザンビアは英国式の教育制度なので、大学のスタッフはアカデミック・スタッフとテクニカル・スタッフに分かれていました。チーフテクニシャンは、英国政府から派遣された英国人で、物品購入に関しては彼が全部を調整してくれていました。

多様なコミュニケーションネットワークの構築―認識を共有し、情報ギャップの解消を図る

当時私が一番気にしたのは、コミュニケーションの取り方でした。コミュニケーションがしっかりと取れるかどうかで様々なことの成否が決まってきます。そのため認識を共有して情報ギャップの解消を図る必要がありました。それは獣医学部の中もそうですし、ザンビア側との間でもそうです。さらには日本大使館や専門家の間でも重要なので、私は様々な打ち合わせ会議を定例化していきました。



調査回訪問時に獣医学部スタッフとの記念撮影
（中央の長身の白人がリー学部長、右端が秘書官のコールダーさん）

ザンビア大学では大統領が学長だったので、キーパーソンだったのは副学長と副学長補です。その両者の秘書官にコールダー (Jean Calder) さんという白人の女性がいて、この方とパイプを持ち、専門家が来るからこうして下さい、調査団員が来るからこうして下さい、ザンビア側から何かニーズがありますか、といったことを毎週定例会で打ち合わせをしていました。

獣医学部ではアイルランド人のリー (R.P. Lee) 学部長が学部長諮問委員会 (Dean's Advisory Committee) というものをつくり、4講座の主任とチーフテクニシャンと私とで、いつからアカデミックな講義をするか、手当をどうするか、といった話をしていきました。

さらに日本のチームリーダーと私と学部長と学部長補佐官の4人で、学部運営委員会

(Executive Committee) というものも別途立ち上げて、学部運営の中で日本が協力するところとそうでないところの線引きをしていきました。こうした調整が初期には大変だったことを覚えています。一方、日本人同士のコミュニケーションにも問題が起こらないように、日本人だけでのミーティングも定期的に行うようにしていました。

私の部屋にはビジョンボックス（郵便受け）を置きました。郵便物は大使館に届くので、それを私が集めて、私の部屋の各専門家の箱に置くようにしたのです。専門家は郵便物が届いているかどうかを私の部屋に確認しに来るので、私はそのときを見計らって「どうですか」と声をかけて色々な話をして、コミュニケーションを図っていました。

部屋を空けるときは、ドアのところに行き先と戻り時間を示しておきました。部屋には私費で購入した冷蔵庫があつて、その中にいつもジュース等を入れておき、ポットとコーヒー等も用意しました。何かないと来てくれなくなってしまうのではないかと思い、ある意味で郵便物と飲み物を「餌」にしたのです（笑）。実際この方法はうまくいき、郵便物と飲み物を置いておけば専門家が無理なく集まって来るということが現地の体験で良くわかりました（笑）。

短期専門家は毎年3名から5名くらい来ていました。プロジェクトでは必ず家族ぐるみで歓送迎会を開き、空港への送迎やホテルの用意なども全部やりました。私は大学の身分証明

書を持っていたのですが、それは空港の中に入るのにパスポートよりもはるかに有効でした。当時のザンビアはJICA事務所ではなく協力隊の調整員事務所だったため、日本大使館が直接専門家やプロジェクトのを見ていました。大使館の方がたは本当によくやって下さったと思いますが、経済協力班には出向者ばかりで外務本省の方がおらず、全体の調整や業務の流れについてはこちらの方がよく知っていたため、大使館には毎日のように打ち合わせに行きました。大使館も本省に確認する必要があったので、とにかく材料を全部揃えてお願いに行くというのが日常業務でした。当時は今ほど通信状態が良くない上に国際電話も高かったので、テレックス通信が中心でした。

また当時ザンビアには別に5人の専門家が個別専門家として派遣されていて、プロジェクトでは我々6人とその後に来た医療協力のプロジェクトと合わせて12人ほどの専門家がいきました。みんな「ザンビア専門家の会」というものをつくり、私が事務局長をやり、個別専門家の方を会長にして、専門家をまとめようと活動しました。会報も月に1回ずつ発行しました。こういった活動をしながら、ザンビアにJICA事務所がないことを補っていました。日本大使館や相手国政府に対してJICA専門家はきちんとやっているということを示そうというのが、我々が「ザンビア専門家の会」をつくった趣旨でした。

このプロジェクトで特筆すべき事柄の一つは、日本の国内支援体制です。調査団員や青年

海外協力隊員等も含めると最終的には12年間で150人ほどの日本人が現地へ行っています。最初に委員長をされていたのは、東京大学の微生物学の教授をした後、麻布大学獣医学部の教授（後に学長）をされた尾形学先生です。尾形先生は後に日本農学会会長も務めて、獣医師界における影響力が非常に大きな方でしたが、この方が指導力をもってこのプロジェクトに関わって下さったことが第一だったと思います。また北海道大学がとても頑張ってくれたのと、帯広畜産大学がよくサポートに回ってくれたこともとても大きな成功要因でした。また当時のJICA畜産技術協力課の小野（英男）課長の存在もとても大きかったと言えます。小野課長は北海道大学畜産学部を出ていて、国内をうまくとりまとめられました。これは大変ありがたいことでした。

プロジェクトの事務的な課題を一つずつ解決していく

ザンビアでは、ワークパーミット（労働許可証）を取得しないと専門家として仕事ができなかったのですが、このワークパーミットの取得が、実はとても大変でした。日本のR/D（討議議事録）などはとても厳格にできていて、住宅の提供や医療費の負担が相手側に義務

付けられているため、彼らはそれをまじめにやろうとするのです。ザンビアは契約社会なので、もしも住宅提供ができなかったらどうしたらいいのかと担当職員が悩んでいました。この約束が果たせていないのに、協力隊員を受け入れていいのかとも相談を受けました。他の国でも住宅が提供されない例は少なくないし、別に問題はないよと言いたいところでしたが、こちらからそれを言う訳にもいかず、私も苦しみました。

こうした事柄に一つずつ道筋をつけ、解決策に結びつけていくことが大変だったという記憶があります。それほど真摯に約束を捉えていたので、彼らはずいぶん多くの約束を履行してくれたと思います。ザンビア大学には13学部ほどあって、大学全体の研究費が年間110万円くらいだったのですが、なんとそのうちの100万円くらいを獣医学部に当ててくれていたと思います。

一方で、プロジェクトの現地業務費は、最貧国対策費と現地研究費、現地業務費などを合わせると月に100万円ほどもありました。けれどもそれを言うくと足元を見られてしまう可能性があり、私からはあえて言いませんでした。「本当に困ったことがあったら言ってくれ、私が何とか本部に掛け合うから」といつも言いながら、私のポケットには大きな額のお金がありました。消毒薬購入のために5千円なんとかならないかと言われ、「それは難しいな」などと言いながら出したこともあります。



新旧リーダーの交替(左より石谷リーダー、ムウエニ副学長補、石谷夫人、藤本(辞)リーダー)

また、日本の事前調査団が約束していた住宅提供のために、彼らは官舎を新しくつくっていただきました。結局は完成が1年くらい遅れたのですが、6人の専門家のうち3人にはその住宅に入ってもらいました。アジア式の「阿吽あうんの呼吸」というよりは、「できる・できない」という風に白黒を決めていくので、そういう意味で、フラストレーションはあまり溜まらなかったかも知れませんが、彼らが「わかった」と言ったのにやっていなかったということは全くありませんでした。ただ時間にはルーズなところがあって、専門家にワークパーミットがなかなかおりなかったのも、大学や役所の中を回って「一番下の書類を出せ」と書類の山をひっくり返させたこともあります。

当時のザンビアは高度成長下だったので外貨

がとても不足していました。当初は1ドルがザンビアの通貨で2クワチャというレートだったのですが、私が赴任していた2年の間に価値が10分の1くらいになってしまったのです。こういった状況で賃金を決めたり物を買うのはとても大変な作業でした。後から来た個別専門家などには、現地業務費を一気に換金せず小出しにしなければだめだよと助言をしていました。一度に換金した後、ストーンと3分の1くらいになってしまうこともありました。

実際に現地が一番困ったのは、電圧が激しく変動することでした。220ボルトが250ボルトになったり180ボルトになったりしました。医学の機械はとても精密にできているので、こうした状況に耐え切れず壊れてしまいます。そのため100万円もするような機器は大事にしすぎて使わないこともありました。不安定な電圧から電子機器を守るために、一般的には電圧安定器を使うのですが、たくさんの機器があるため、一つ一つに付けるとなると何千万円という額になってしまいます。結局、機材修理の専門家を1人要請して来てもらい、その方が色々なものを直してくれたのでとても助かりました。

学部の運営管理にも関わりながら、『ザンビアナイゼーション』を目指す

私と多田さん（多田融右国際協力専門員、フェーズ1の長期専門家、且つフェーズ2後半のリーダー）が当時35〜37歳くらいで、他の4人の専門家の方がたは皆さん大学を定年退官されて来ていましたので65歳以上でした。息子1人に親父が2人ずついるみたいだと私たちは言っていました（笑）。先生たちは研究者でもあるので、周りと調整しながら進めることに気を配ったりすることはほとんどありませんでしたが、我々世代の感覚だと、プロジェクトの進め方はもう少し色々調整しながら進めなければいけないのではないかという問題意識を持っていました。

現在、食品安全委員会の委員長をされている見上先生（見上彪氏、当時北大獣医学部助教）という方が短期専門家に来てくださったのですが、この先生に我々の問題意識をぶつけて、国内支援委員会に提案書を出してもらったことがあります。それは実のところとても大胆な案だったのですが、そういったものを国内支援委員会に提出したことで、委員会の方がたにもプロジェクトの問題の所在を理解してもらえたのだらうと思います。

「現地にいる人間が書く」と東京に対して反旗を翻したことになるから俺が全部書いたことにして責任をとってやる。お前ら書きたいことを全部書け」と見上先生は言ってお下さいまし

た。そして我々が書いたものを見上先生が訂正して、国内支援委員会に提出して下さいました。部数限定でしかつくらなかったはずなので、その後どこをどう回ったのかはわからないのですが、国内支援委員会の先生方には回ったはずですよ。

後に、金川先生（金川弘司氏、当時北大獣医学部獣医学部長）が国内支援委員会の委員長として取りまとめた『ザンビア大学獣医学部技術協力・12年半の協力の軌跡』（1998年）という報告書があるのですが、その中に「見上レポート」というものが出てきます。この「見上レポート」がこのときに私たちが原案を書いたものです。現地で私たちが悶々とせず活動できたのは、見上先生のような理解者がいたからだと思います。我々の声に耳を傾けてくれた見上先生には本当に助けられました。勇気づけられたと言ってもいいでしょう。

例えば、チームリーダーが講座主任を兼ね、病理学も教えるという1人3役をしていたため、これではプロジェクトのマネジメントという視点で厳しいものがあると思っていました。どれか一つを外してくださいと直接頼んだこともありました。私がこんな不躰なことを言えた義理ではないのですが、リーダーもそうかなと言っていました。ただ、様々なことを考えて最終的に全部やるとリーダーは言われたのだと思います。実際現地においてマネジメントと教育を切り離れた方がいいのではないかと私たちは思っていました。

私たちが赴任したときには、ザンビア全国に70人くらいの獣医師がいたのですが、ザンビ

ア人はわずか10人程で、獣医学部にいたのはそのうちの2人でした。その後この2人のうち1人は海外へ出稼ぎに行ってしまった、残った1人は博士号を取りに日本へ行くことになっていました。

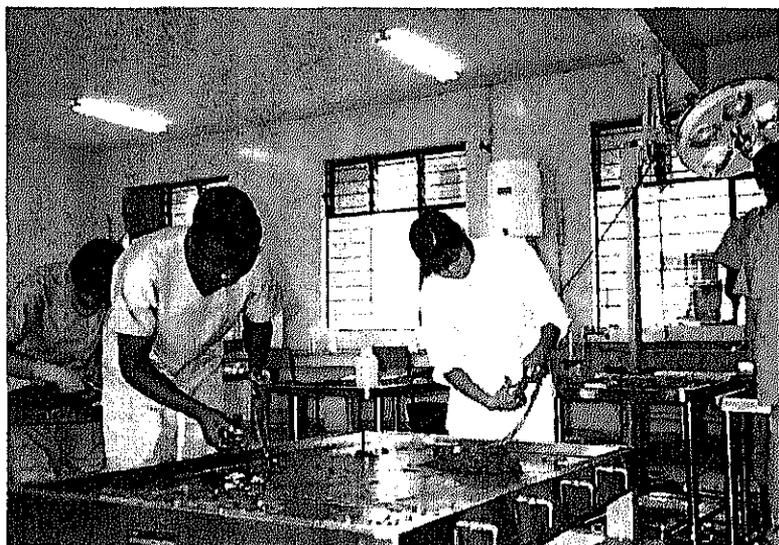
このため、『12年半の協力の軌跡』にも記載されているかもしれませんが、当時、日本側としては、獣医学部の運営管理面よりは教育面により重点を置いていこうとしていました。そのベースとなったのが、やはり『ザンビアナイゼーション』だったと思います。ザンビリア教官を育てることが最優先事項と考えていました。結果的に、日本側の先生方も自ら研究したいというお考えではなかったもので、むしろ教育に力を入れて頂きました。

プロジェクトの初代チームリーダーの石谷先生は当時69歳で任期が1年のみでしたし、たまたまアイルランド人の学部長のリー先生も同い年で、任期も1年のみでした。初代のこの2人がいる間に「青年よ、大志を抱け (Boys, Be Ambitious)」ではないですが、「ザンビリアよ、大志を抱け」みたいなことを言って帰ってくれないと獣医学部はどうなってしまうのだろうという危機感がありました。そのような中で、獣医学部に、またザンビア大学に、そしてザンビリア人に自立への機運をどうつくるかというキーワードとして、『ザンビアナイゼーション』というものを思いついたのではないかと思えます。人を引っ張っていくためにはそれだけの人間的な魅力がなければできないものですが、石谷先生とアイルランド人のリー

先生はタイプが違ったものの、人間を引っ張っていく力を持っていました。だからこそ何とかこのプロジェクトが着地点に到達できたのではないかと思っています。

獣医学部では自分たちでお金を稼げるように臨床病院も持ってはいたのですが、体制整備がなかなか計画通りに進んでいませんでした。

マネジメントが不在になってしまうと教育の方もおろそかになってしまいうので、私としてはマネジメントだけはしっかりやっていこうと思っています。そのため、私自身も学部の運営管理にはずいぶん関わりました。特に、プロジェクトの位置づけはどうなっているのか、進捗状況はどうなっているのか、といったリーダー会議の資料もまとめたりしていました。また、ザンビア大学で話していることや、リーダーの



病理解剖実習風景（中央の女性は初代JOCV隊員の岡（みさを）さん）

あり方などについても書かざるを得ませんでした。専門家の要請書などもすべて私が書きました。

しかし、プロジェクトにあまり「橋本色」を残してはいけないと思っていましたので、帰ってきてからはほとんど口出しをしないようにしていました。専門家も事務所も人が替わるので、自分がやってきたようにやれと言うのは足かせになるのではないかと思つたからです。そのため、ああした方がいい、こうした方がいいということは言わずに後任には「引継ぎ書」だけを置いてきて、後はもう彼らが判断するしかないだろうと思つていました。

達成された『ザンビアナイゼーション』を22年ぶりに確認

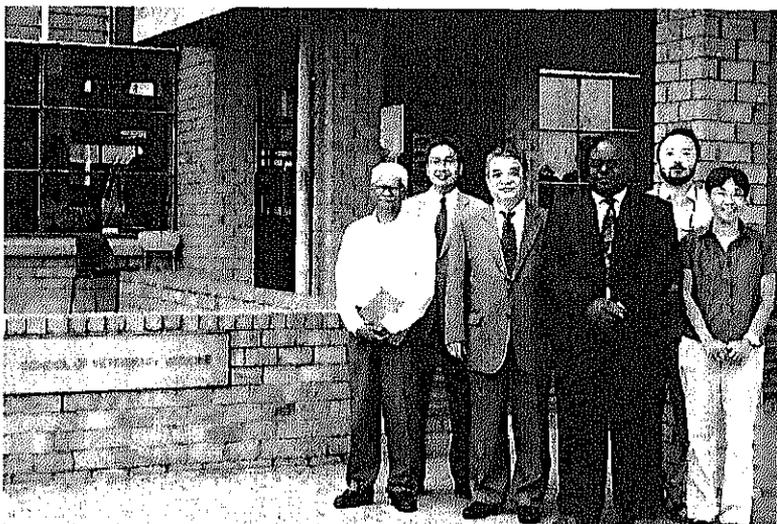
『ザンビアナイゼーション』は現段階ではほぼ達成されていると思います。但し、経済状況が悪化したり、カウンダ大統領というカリスマ的な大統領が代わったりすることがあるとどうなってしまうのかと、当時は将来の想像ができませんでした。『ザンビアナイゼーション』がスムーズに行くのかどうか、私にも自信があつた訳ではありません。

アフリカは、初期の大統領が長い期間君臨して、ナンバー2をどんどん振り落とすという

形で政権が維持されてきていました。ザンビアもその例外ではありません。民主化や経済状況、アメリカ式の通貨管理、世界銀行の圧力といった要因が複雑に絡み合って社会が進んでいく中で政権が代わっていきます。それに伴って大学でも学部長や副学部長が代わるので、本当にこのままどこに辿り着くのかという不安がありました。

一昨年、22年ぶりにザンビアに行く機会がありました。獣医学部はしっかり運営されていて、大学院もできていて周辺国から留学生が来ているということもわかりました。とても嬉しいことでした。ムウイネ (Aaron S. Mweene) 学部長とも1時間ほど話したのですが、彼は私のことを覚えていました。実は彼は第1期の学生だったのです。その彼が「お陰様で日本で学位を取ってここまでできました」と言ってくれたときには本当に嬉しかったです。

もう一つ嬉しかったのは、ザンビアにあるもう一つの国立大学のコッパベルト大学のムソンダ (M. M. Musonda) 学長が、20数年前にザンビア大学に2人いた獣医師のうちの1人だったことです。日本で学位を取り、しばらく初代のザンビア人学部長として日本人専門家と一緒に獣医学部の講座マネジメントをしていて、その後投票でコッパベルト大学の学長になっており、今でもJOCVの隊員やシニアボランティアの人たちを受け入れてくれていたそうです。20数年前に日本とザンビアがつくったプロジェクトが、人の繋がりによって発展しているということがわかって、本当に嬉しい再会でした。



22年ぶりの獣医学部再訪時（左端より2人目が鍋屋（史郎）JICAザンビア事務所長、その右隣が橋本JICA理事、ムウイネ獣医学部長、北大の常駐者、蔵田専門家）

先ほど話に出した多田さんはいつも謙遜していて、このプロジェクトが成功したのはラッキーだったからだとおっしゃるのですが、初めからフィールドプレイヤーとして入り、後にリーダーにもなった多田さんの活躍もここで紹介しておきたいと思います。多田さんは初期の頃からプロジェクトにずっと関わっていて、帰国後JICAの国際協力専門員になり、フェーズ2の終わりにチームリーダーの重責を担われ、後に第三国研修の立ち上げや今動いているプロジェクトの立ち上げにもずっと関わっていました。立ち上げ期からずっと見守っている人がいるというのはプロジェクトにとってとても恵まれたことです。

もともと多田さんは外資系の製薬会社で働いておられて、そこを辞めて専門家として来られ

た方です。一足先に帰ってきて企画課長代理をしていた私のところを訪ねて来られたときに、JICAが新しくつくった国際協力専門員制度にアプライしてみたらどうかと勧めました。とにかく多田さんはザンビア獣医学部のプロジェクトのことをずっと見続けてきてくれました。こういう人がいないと、ここまで活動が繋がってこなかったのだらうと思います。

JICA専門家にとって不可欠な資質——専門性はもちろんのこと、良き日本人であること。また、複数の物差し（尺度・視点）を持っていること。

良き日本人とは、謙虚さ、頑固さ、丁寧さ、誠実さなど、どの言葉を当てはめたらいいのか良くわかりませんが、日本人であり続けようとする人のこと。言い換えれば、日本人として恥ずかしくない生き方をおそうとする人のことなのではないかと思えます。なぜなら技術協力とは関係する色々な人たちとの上下の関係ではなく、全人格的な人間同士の触れ合いの中でしか思いが伝わらないという類のものだからです。私はこれをJICA人生の中でつくづく感じてきました。年齢差や能力差など色々なものがありますが、本当に辿り着きたい

ところには、みんなの思いが一つにならないと絶対に到達できないのではないかと思つています。

もう一つは、専門家は「森の石松」であつてはいけないということです。価値観やタイムフレームなりを計る物差しが森の石松のように1本差しだと応用が利かないのです。何が起きるかわからないような時間の流れの中で、イマジネーション（想像力）とクリエイティブティ（創造力）をもつて、カウンタートパートと第3、第4の物差しをつくっていけるような、複数の物差しを腰に指す人でないと、限られた時間の中で成果は生み出せないのではないかと思ひます。「ザンビアの物差しはこうなんだ。こんな物差しもあるんだ」と感動して終わるようでは、次のステージには進めません。そういう意味では、専門家の方がたにはぜひ2本以上の物差しを腰に差す人になつて欲しいと思つています。

私にとっての技術協力とは、現地あるいは現場のニーズに合致した付加価値の高い適正技術を関係者が協働でつくりだしていくプロセスとその成果だと思ひます。特に、物事をつくりだす「プロセス」が大切なのではないのでしょうか。成果主義が幅を利かせるようになって、このところ成果にばかり囚われがちですが、実はプロセスの中でしか生まれないものがあるのではないかと思つています。その結果に到達できなくても、決められた時間の中だけで納まらなくても、遠回りしたり乗り越えたりして、必ずそちらに行くのだという思いが、技術

協力の中には熱く流れているのだと思います。それがなければ続くものではありません。

先日たまたま東京都の教育委員会で講義をする機会があり、高校生や大学生に話をしなければいけなかったので、メッセージを何にしようかと考えていました。グローバルセッションとか、何のために人は生きるのか、といったことを考えたとき、「時間」と「空間」と「人間」という漢字を並べてみると、全てに「間」という字が入っていることに思いあたりました。

「間」は繋げていかなければならないと思います。繋がりを大事にすることが生きていく上でどうしても必要なのではないかと気づきました。「時間」を繋ぐとはどういうことかという、昨日と今日と明日の繋がっている時間の中に自分は置かれています。「空間」は通信技術や交通手段が開発されればどんどん間が縮まっていきます。「人間」はこの青い地球上で共存していかなければならないので、自由であるとか平和であるとか公正であるとかを反映する社会をどう実現していくのかという目標に向かって、思いを繋げる必要があるのではないかということメッセージにしました。

かつてJICAのモットーが「人づくり、国づくり、心のふれあい」だったように、国づくりの基礎となる人づくり、組織・制度づくりを、フェイス・トゥ・フェイス、人から人へ伝えていくのが、21世紀のJICAのチャレンジだと私は思っています。・・・」



みかみ たけし
見上 彪 氏

担当分野：鶏^{けいびょう}病学（フェーズ1）

1938年台湾生まれ。内閣府食品安全委員会委員長（東京大学名誉教授）。62年に北海道大学獣医学部を卒業し、64年に同大学大学院で修士号（獣医学）、70年にはカリフォルニア大学デイビス校で博士課程を修了し、Ph.D.を取得。その後札幌医科大学講師、ドイツハノーバー獣医科大学研究員、北海道大学獣医学部助教授を務める。85～86年にザンビア大学獣医学部プロジェクトの短期専門家として従事。88年以降、東京大学、帯広畜産大学、日本大学で教授として教鞭を取り、06年より現職。76年に日本獣医学会賞、98年に日本農学会賞（読売農学賞）、03年に紫綬褒章を受賞。

私は特に国際協力を意識していた訳ではなく、自分の専門でたまたま他の国の人たちと仕事ができただけだと思っています。

昭和37年3月に北海道大学獣医学部を卒業した見上彪氏は、北海道大学の助教だった時代に、ザンビアで行われた「ザンビア大学獣医学部技術協力計画プロジェクト（フェーズ1）」の鶏病分野の専門家として、3か月間現地で活動している。

東京大学教授などを経て、現在は食品安全委員会の委員長を務めている見上氏。輸入食品の残留農薬問題、腸管出血性大腸菌O157の問題、牛海綿状脳症（BSE）をめぐる問題等でも注目される食品安全委員会は、食品安全基本法が制定された平成15年（2003年）に内閣府に設置されている。

帯広畜産大学病原虫病研究センターのセンター長を務め、食品安全委員会設置当初からの委員でもある見上氏にとって、ザンビアでの専門家体験はどのようなものだったのだろうか。

見上彪氏のザンビアでの挑戦を紹介してみたい。

ラグビーのために獣医学を学び、その後国際協力へ参加

「・・・私は都立豊多摩高校という杉並区にある学校の出身です。高校時代はクラブ活動が好きで、生物部と剣道部に所属しており、おまけにラグビーまでやっていました。とにかくアウトドア的なことが好きだったので。雄大な大地にあこがれて入った北海道大学では、当初の専攻は獣医ではなく、水産でした。その頃、北大には理類、文類、水産類、医学進学課程の4つがありました。その中でも水産類が一番やさしかったのです。私の成績だったら多分この水産類だろうと思って（笑）、私は1年間浪人をして、北海道大学の水産類に入りました。

当時の北海道大学水産類のシステムは、1年半は札幌で教養課程を受けて、2年の後半から函館に行くというものでした。私は北海道大学に入ったのと同時にラグビー部にも入りました。1年目はレギュラーになれなかったのですが、2年生になってレギュラーまでもう少しというところまでいきました。けれどもやはりレギュラーにはなることができませんでした。涙、涙で函館のキャンパスに行き、1年間を函館で過ごしたのですが、どうしても私は北大ラグビー部のレギュラーになりたくて水産学部から獣医学部に編入したのです。獣医学を志したきっかけはラグビーでした（笑）。大学時代は念願のラグビーを一生懸命にやり、

獣医の勉強もそこそこをやっていたのですが、卒業するときには今度は就職試験がラグビー部の全国大会の予選日と重なってしまいました。迷った末に私はラグビーをとりました（笑）。卒業後は父のアドバイスもあつて、大学院のマスター（修士課程）へ行きました。

大学院にいたときに、隣の部屋の教授から「マスター修了後に何をやりたいのか」と聞かれたことがあります、「米国に行きたいです」と言っていました。するとこの教授のところには「日本人で誰か若くて元気のいいやつはいないか」という話が来て、私はカリフォルニア大学に行くことになりました。

米国では研究をしながら大学院に入り、カリフォルニア大学でドクター（博士号）をとりました。しかし当時は就職が難しい時代でした。どこかの国際機関に勤めたいと思い、FAO（国連食糧農業機関）に2度ほどアプライ（応募）したのですが、門前払いをくってしまいました。

北大のラグビー部の先輩で札幌医科大学の教授だった方がいたのですが、このような私の状況を知り、自分のところに来ないかと誘ってくれました。そこで私は札幌医科大学で基礎微生物学の中のウイルス学を教えることになりました。

ところが3年ほど経った頃、若気の至りでその教授とけんかをしてしまったのです。当時の医者は獣医を低く見ていたところがあり、「獣医のくせに」と言われて、私は思いきって

ここを辞めてドイツに行きました。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団の奨学金をもらってドイツのハノーバーの獣医科大学の家禽病かきん学教室で研究をしました。ドイツで1年近く経った頃、北海道大学から「お前の出た部屋が空になるから」というオファーをもらい、昭和50年（1975年）2月、再び北海道大学に戻ったのです。

私は一生懸命やっていたのですが、言いたいことを言わずに言う性格なので、先輩たちからはよく思われず、やがて昭和63年（1988年）に東大の教授にならないかという話があり、助教授より教授の方がいいから（笑）、東大に行きました。

東京大学で定年の60歳まで勤めあげて、平成10年（1998年）に帯広畜産大学に移り、3年間帯広の原虫病研究センターの長をやって、定年で退官して日本大学生物資源科学部獣医学科に移ったのです。

日大は本来であれば70歳まで勤められたのですが、2年ちょっとしたらこの食品安全委員会ができて、どういう風の吹きまわしなのかわからないのですが（笑）、私に「委員にならないか」というオファーが舞い込みました。このときこのオファーを受けるかどうかについては、とても悩みました。実は、神奈川県藤沢市にキャンパスがある日本大学生物資源科学部獣医学科は茅ヶ崎の自宅から近く、70歳までのんびり過ごすのも人生かなとも思っていました。

今、日大の総長を務める酒井健夫さんは、私を帯広から引っ張ってくれた人なのですが、彼に相談したら委員になった方がいいと勧められました。獣医にとつてそういうポジションはなかなか回ってくるものではないので、先にやっておけと言われたのです（笑）。

それで、私はこの食品安全委員会に来ました。委員になって3年が過ぎた頃、前任の寺田雅昭委員長が病気で倒れてしまい、私が急遽委員長を務めることになりました。

以上が私のこれまでの人生なのですが、ザンビアのこのプロジェクトに参加したのは私がまだ40代。北海道大学の助教授のときのことでした。このプロジェクトの初期で、組織的には寄せ集めの集団が手本も何もない中で必死にチャレンジをしていた時期でした。

プロジェクト初期に短期専門家として赴任

私はザンビア大学獣医学部のプロジェクトでは鶏けいびょう病学を学生に教えました。大学を退官した先生が3、4名プロジェクトチームとして長期滞在をしていますが、まだ色々と試行錯誤の日々でした。一番大きな目標は、ザンビア大学獣医学部の第1期生をとにかく卒業させることでしたが、組織の運営などについては問題が山積していました。

プロジェクトの業務調整はJICAの橋本さん（橋本栄治氏・現JICA理事）で、長期専門家と私のような短期専門家との板ばさみにあつて大変だったと思います。

当時、橋本さん、多田さん（多田融右専門家）や家族で行つていた若い人々に、よく夕食に呼んでもらいました。私は結構そういうことが好きで、他の長期専門家とも釣りに行つて、鯛みたいな小さな魚を釣つてきては、みんなと一緒に食べたりしていました。

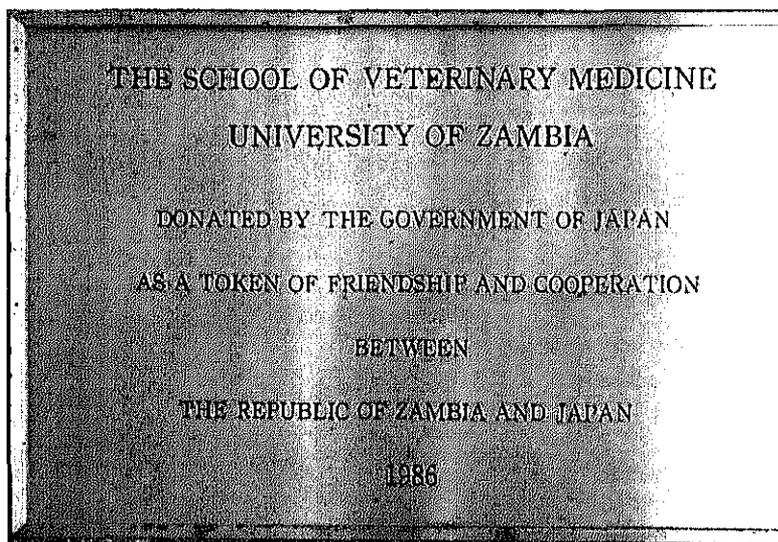
現地での悪い印象はほとんどありませんでした。あるとき銅の産地で暴動が起きて、暴動の主謀者がホテルに逃げ込んだらしく、警察がどばーっとホテルの私の部屋に入り込んできたことがあります。いきなり荷物をどんどん調べていって、なんて失礼なやつらだと思いましたが、別に大したことはないと思つて事務所には連絡もしませんでした（笑）。

もちろん私に疑われる心当たりはありませんでした。周りにたくさんいた下痢の人に薬をあげたことがいけなかつたのかなとも思いましたが、後になって暴動の主謀者を探していたのだとわかりました。驚いたのはこのくらいで、それ以外はザンビアに全く悪い印象はありませんでした。子どもがかわいくて、目がくりくりとしていたことを覚えています。

専門家の中にはなかなか現地に馴染めない人もいましたが、私の場合は最初からうまく適応できました。米国での経験がありましたし、私は台湾からの引揚者で、小さい頃から色々な所で生活をしていましたので、適応力があつたのだと思います。

このプロジェクトは北海道大学が全面的にバックアップしていました。本来は日本獣医学会が人を送る司令塔のような役割を担うのだと思いますが、東京大学ではなく北海道大学にその役割が回ってきたのは、北大の先生がこういう事業に対して前向きだったからだと思います。言い換えれば「開拓精神」ということでしょうか。逆に東大では「なぜ東大がやらなければいけないのか」という感じがありました。

当時、ザンビアのプロジェクトでは3か月の集中講義の講師を募っていたこともあり、私は自ら手を挙げて行きました。カリフォルニア大学に7年近くもいたので、海外への赴任には全く抵抗がなかったのです。私に限らず、北海道大学の多くの先生が参加していました。中には何度も行った人がいたと思います。



我が国の無償資金協力によるザンビア大学獣医学部の施設の供与を示す銘板

普通、こうしたプロジェクトを行う際にはカウンターパートがいて、カウンターパートに技術移転をするという形が一般的なのでしょうが、このプロジェクトの場合には、まず技術を移転するカウンターパートとなる学生から育てなければいけないという特殊な状態でした。最初の頃は、獣医学部の4つのうち2つのセクション（講座）でヨーロッパの人が講座主任をしていました。その後、徐々に学生が育つてくると、北海道大学が大学院にカウンターパートを呼びました。中には、後に病理（基礎獣医学講座）の講座主任になった人もいます。

現状分析に基づく改善案――まずは人を育てる。すべてはそこから始まる

国内支援委員会の先生方もJICAのプロジェクトは初めての体験で、すべてが手探りでした。若い専門家はやる気満々でしたが、プロジェクトが回らなくなつて一時期どうにもならなくなつたことがあります。そのためチーム内がごたごたし、私自身も失敗したのかなとも思いました。運営面でも対ザンビアとのやりとりはすべて若い橋本さんまかせでしたし、各専門家が来てもうまく使えていませんでした。

「ザンビア大学獣医学部技術協力計画・12年半の協力の軌跡」（1998年）という国内支援委員会としてとりまとめた冊子があるのですが、この中に「見上レポート」というものが出てきます。3か月の任期が終わったときに、現地の若手専門家の問題意識も汲んだ上で私がかまとめたものです。「ザンビア大学獣医学部技術協力計画の現状と効率的・効果的運営のための私見」という報告書でした。20部ほどつくったでしょうか。プロジェクト全体のことを思いながら、若気の至りで敢えてこうした問題点の提示を行いました。

ところが、国内支援委員会の委員長・副委員長を始め、色々な人からお叱りを受けて、結局国内支援委員会ですら、私たちの問題提起をディスプレイしてくれませんでした。しかし次第に提言に沿った方向になっていったので、あのときの提言は今でも間違っていないかっただと思っています。

ああいう段階では、まだ研究なんていくらやっても仕方がなく、まずはとにかく教育だと私たちは考えていました。人が育たないことには何も始まりません。

他方、私が行ったときの業務調整は橋本さんだったため、ザンビア大学とはいい関係が構築できていたと思います。それぞれのセクションでトラブルがあったとしても橋本さんがすぐ間に入って、うまく解決していました。

このプロジェクトでは、初期の頃から「ザンビアナイゼーション」というスローガンを使